

かたせばる  
片瀬原第2遺跡

民間開発（宅地造成工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2020

宮崎市教育委員会



かた せ ばる  
**片瀬原第2遺跡**

民間開発（宅地造成工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2020

宮崎市教育委員会





片瀬原第2遺跡垂直写真（上が西側）

卷頭図版 2



SA10 土器埋設遺構 北から



土器埋設遺構37 南から



土器埋設遺構38 西から

# 序

本書は平成29年度に宅地造成工事に伴って発掘調査が行われた片瀬原第2遺跡の発掘調査報告書です。

片瀬原第2遺跡は宮崎市佐土原町下那珂にあり、今回の発掘調査の結果、飛鳥時代から奈良時代にかけての竪穴住居跡や建物跡が多数発見され、大規模な集落跡であることがわかりました。本遺跡の周辺には古墳時代の広瀬村古墳群、土器田横穴墓群などがありますが、それに続く時代の集落遺跡の発見となりました。

この時期の集落跡は宮崎県全域を見ても数が少なく、本地域だけでなく県全体の古代史を語る上でも重要な調査成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけではなく、学校教育や生涯学習などにも広く活用され、埋蔵文化財保護の理解につながれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施に関しまして理解とご協力を賜りました事業者の皆様を始め、地元の方々に心から感謝し御礼申し上げます。

令和2年3月

宮崎市教育委員会

教育長 西田 幸一郎

## 例　　言

1. 本書は民間開発（宅地造成工事）に伴って行われた宮崎市佐土原町下那珂に所在する片瀬原第2遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本業務は民間事業者から依頼を受けて宮崎市教育委員会が実施した。発掘調査は平成29年度で終了し、平成30年度から令和元年度にかけて整理作業が行われた。
3. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体：宮崎市教育委員会

平成29年度（発掘調査）

平成30年・令和元年度（整理作業）

文化財課　課長	羽木本光男	文化財課　課長	富永英典
総括	井田篤	総括	井田篤
調整担当	金丸武司	調整担当	稻岡洋道
庶務事務	杉尾　悠	庶務事務	杉尾　悠 (H30)
調査担当	秋成雅博	主　　事	高田真帆 (R1)
嘱託	今井直緒	整理担当	秋成雅博
		嘱託	今井直緒
		嘱託	菊地ひろみ

4. 遺構の実測は秋成・今井・石村友規（文化財課主査）が主に行い、一部を布ジバングサーベイに委託した。
5. 遺物実測は生目の杜遊古館にて秋成・菊地・佐伯美佐子・小牟田智子・小野貞子・船石涼代・徳丸理奈・古田矩美子（以上6名文化財課嘱託）及び整理作業員が行った。
6. 鉄製品の保存処理は㈱イビソク宮崎営業所に委託した。
7. 遺構の写真撮影は秋成・今井が行い、空中写真については九州航空株式会社に委託した。また遺物の写真撮影は秋成が行った。
8. 本書で使用する北は真北である。
9. 本書の執筆は第1章と第2章第1節を金丸武司が行い、その他を今井の協力を得て秋成がおこなった。編集は秋成が行った。
10. 出土遺物及び掲載図面・写真は宮崎市教育委員会で保管している。資料の閲覧・利用に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。

なお、本書の刊行に当たって下記の方々にご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。  
(敬称略、順不同)

今塩屋毅行（宮崎県埋蔵文化財センター）、堀田孝博（宮崎県立西都原考古博物館）、  
近沢恒典（都城市教育委員会）

## 本文目次

第Ⅰ章 遺跡周辺の環境 .....	1
第1節 地理的環境 .....	1
第2節 歴史的環境 .....	1
第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過 .....	3
第1節 調査に至る経緯 .....	3
第2節 調査の概要 .....	4
第Ⅲ章 古代の調査 .....	5
第1節 遺構の調査 .....	5
第2節 遺物包含層の調査 .....	28
第Ⅳ章 中世以降の調査 .....	30
第V章 まとめ .....	30

## 挿図目次

第1図 片瀬原第2遺跡周辺の遺跡分布図 .....	2
第2図 遺跡周辺地形図 .....	3
第3図 片瀬原第2遺跡全体遺構配置図 .....	6
第4図 片瀬原第2遺跡古代主要遺構配置図 .....	7
第5図 SA 4～6実測図 .....	9
第6図 SA 4・5出土遺物実測図 .....	10
第7図 SA11～16実測図 .....	11
第8図 SA11～16断面図 .....	12
第9図 SA11・12土層図 .....	12
第10図 SA11・12・15・16出土遺物実測図 .....	13
第11図 SA16・SE17実測図 .....	15
第12図 SA10・18・19・SE17実測図 .....	16
第13図 SA10土器埋設遺構実測図 .....	16
第14図 SA10・18～20・SE17出土遺物実測図 .....	17
第15図 SA20～23・SC26実測図 .....	18
第16図 SA21南側壁面土器埋設遺構実測図 .....	19
第17図 SA21南側壁面出土環状土器実測図 .....	19

第18図	SA20・23土器埋設遺構実測図	19
第19図	SA20・23土器埋設遺構出土遺物実測図	19
第20図	SA20～25・SC26出土遺物実測図	20
第21図	土器埋設遺構37実測図及び出土遺物実測図	21
第22図	SA25・28・32～35実測図及び出土遺物実測図	22
第23図	SA29～31・36実測図	23
第24図	SA29～31出土遺物実測図	24
第25図	土器埋設遺構38及び出土遺物実測図	24
第26図	SB39実測図及び出土遺物実測図	26
第27図	遺物包含層出土遺物及び表採遺物実測図	27
第28図	片瀬原第2遺跡中世以降遺構配置図	29
第29図	SC1実測図	30
第30図	SC1出土遺物実測図	30
第31図	SE9出土遺物実測図	30

## 表 目 次

第1表	出土土器観察表①	32
第2表	出土土器観察表②	33
第3表	出土土器観察表③	34
第4表	出土土器観察表④	35
第5表	出土土器観察表⑤	36
第6表	出土陶磁器観察表	36
第7表	出土石器観察表	36
第8表	出土鉄製品観察表	36

## 図版目次

図版1	遺跡遠景及び竪穴住居写真	37
図版2	竪穴住居写真①	38
図版3	竪穴住居写真②	39
図版4	竪穴住居及び土器埋設遺構38写真	40
図版5	竪穴住居跡出土遺物①	41
図版6	竪穴住居跡出土遺物②	42
図版7	竪穴住居跡出土遺物③	43
図版8	竪穴住居跡・土坑・溝状遺構及び遺物包含層出土遺物	44

# 第Ⅰ章 遺跡周辺の環境

## 第1節 地理的環境

宮崎県央部の東側、日向灘沿岸に位置する宮崎平野は、陸地の隆起により海岸線が後退しながら形成された海岸平野である。その沿岸部では日向灘に平行する4つの浜堤（砂丘）の連なりを見ることができ、それぞれ西側から東側にかけて第1砂丘から第4砂丘と呼ばれている。

片瀬原第2遺跡はこれらのうち最も古い時期に形成された第1砂丘上に位置している。また本遺跡の西側には石崎川が蛇行しながら砂丘を迂回するように北に向かって流れている。

## 第2節 歴史的環境

石崎川左岸の丘陵末端部に立地する下那珂遺跡は、旧石器時代のナイフ形石器文化期や細石刃文化期、縄文時代早期の押型文土器や炉穴が確認されたほか、弥生時代後期～終末期は堅穴建物が120軒検出され、記号や絵画が線刻された土器や瀬戸内・畿内系の土器、大量の石包丁、爬龍文鏡（破鏡）が出土した。これらの成果から、稻作による生業が確立し他地域と交流を持つ、宮崎平野の弥生時代を代表する大規模な集落遺跡と位置づけられている。また下那珂遺跡西側の丘陵上にある下那珂貝塚は、貝層と共に「飛鳥」の線刻が行われた弥生時代の壺が採集された。なおこのほかにも弥生時代の遺跡としては、「中溝式土器」の標識遺跡となった中溝第2遺跡が本遺跡の南東部に位置し、北西部には近年調査が行われた圓墳遺跡において弥生時代中期の溝状造構から管玉や打製石器などが出土するなどの本遺跡周辺で注目される調査成果が得られている。

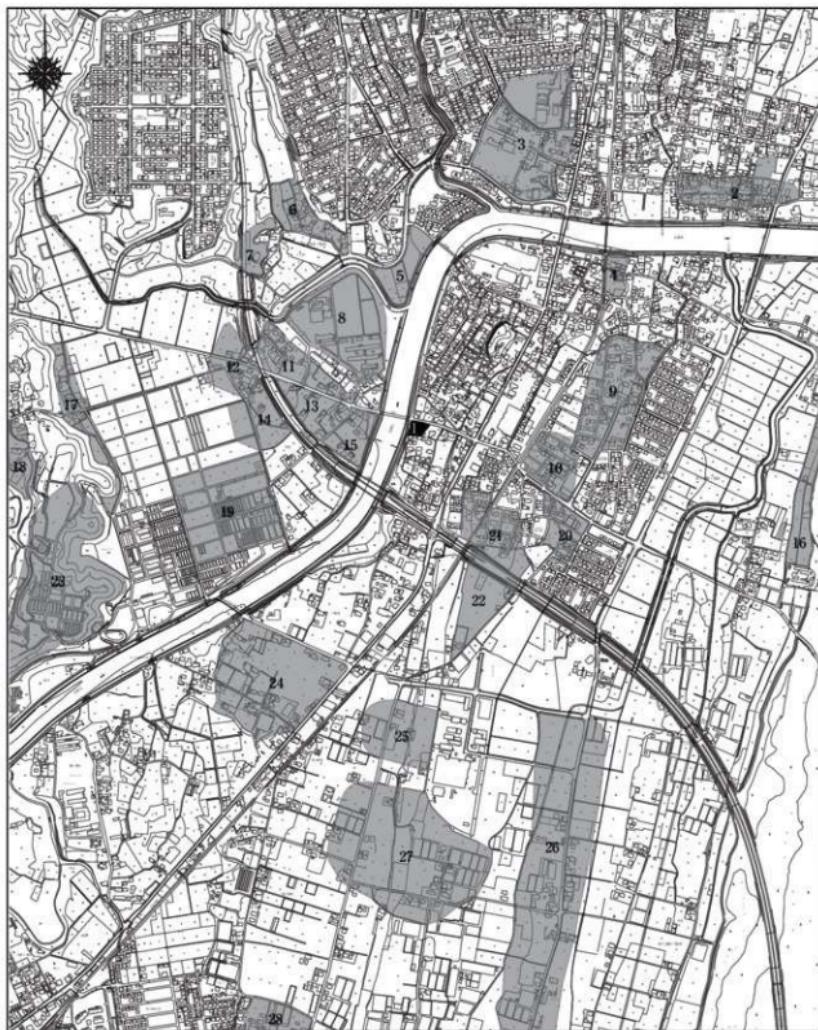
古墳時代は、宮崎県総合農業試験場周辺に広瀬村古墳群が分布する。吾平神社（平小牧稻荷神社）内にある46号墳は低地に作られた周堤を伴う前方後円墳である。このほか試験場の丘陵上や麓の低地に円墳が15基、丘陵斜面に横穴墓が42基分布する。このほか、下那珂の丘陵上にある下那珂馬場古墳は前方後円墳であり、甲冑などの鉄器が副葬されている。光陽台团地東側では土器田横穴墓が発見され、東1号は玄室の壁に三角文や魚、馬などの線刻が行われている。このように広瀬地区には多くの特色ある墳墓が分布するが、古墳時代の集落は不明である。

古代は、片瀬原第2遺跡の南部に立地する片瀬原遺跡より大規模な集落の存在が確認されている。一部は発掘調査が実施され、9世紀代の土師器、須恵器を伴う堅穴建物が確認された。

中世から近世にかけては上田島にある佐土原城に城下町が形成されるため、広瀬地区に関しては文献等が殆ど残されておらず不明な点が多くあったが、前述の圓墳遺跡において中国産陶磁器が出土した大溝や掘立柱建物跡等が検出されており、その空白が埋まるような成果が得られている。

幕末に起きた戊辰戦争に加わり、戦後恩賞として加祿が倍増した佐土原藩は、明治2年、広瀬小学校・広瀬中学校を含む一帯に広瀬城の築城を決定。資材の輸送のために一つ瀬川と石崎川を運河で繋ぎ、旧藩主以下佐土原城下に住む士族、商人の多くが移転する一大事業を開始した。城下は武士の居住城を定め、町人街（栄町）、荷揚屋・歓楽街（稲荷町）、学校、砲兵練習場等を設けた。築城まで旧藩主が住む屋敷は片瀬原第2遺跡南側の砂丘上に建てられた。砂丘の麓は今も「御殿下」と言う地名が残される。移転に当たっては士族に多大な出費を強いたが、明治四年に廃藩置県に伴って築城は中止となり、旧藩主は華族として東京に移住。佐土原藩も消滅した。

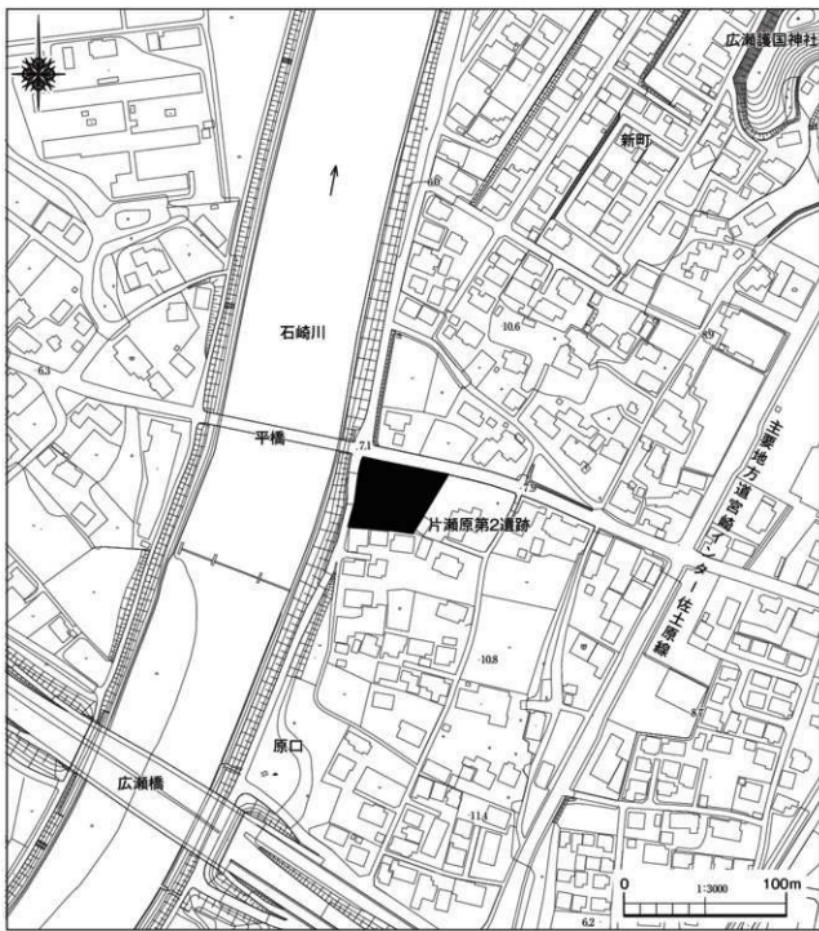
西南戦争後、広瀬に住む旧士族の出資により砂地を利用してサツマイモを栽培、収穫されたサツマイモは製糖工場にて砂糖が作られた。数年後に桑の育成が促進され、養蚕業や製糸工場が営まれるようになつた。糸は福島港を介して大阪に出荷され、広瀬地区はようやく活況を呈すようになった。



1: 片瀬原第2遺跡 2: 竹下遺跡 3: 広瀬城跡 4: 竹ヶ島第2遺跡 5: 小平遺跡 6: 小牧遺跡 7: 平郷横穴墓群 8: 圆跡 9: 竹ヶ島遺跡 10: 熊田遺跡 11: 平村第3遺跡 12: 平村第2遺跡 13: 尾原第3遺跡 14: 平村第1遺跡 15: 尾原第2遺跡 16: 明神山遺跡 17: 西大坪遺跡 18: 田淵田遺跡 19: 尾原第1遺跡 20: 伊賀給遺跡 21: 中溝第1遺跡 22: 中溝第2遺跡 23: 下那珂遺跡 24: 片瀬原遺跡 25: 下ノ山第1遺跡 26: 下ノ山遺跡 27: 下ノ山第2遺跡 28: 四本松第1遺跡

0 1:15000 1000m

第1図 片瀬原第2遺跡周辺の遺跡分布図 (S = 1/15000)



第2図 遺跡周辺地形図 (S = 1/3000)

## 第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

平成29年5月26日、宅地分譲予定地内の埋蔵文化財の有無について照会があった。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地「片瀬原遺跡」に近接することから平成29年8月25日に試掘調査を実施したところ、予定地全体から多数の堅穴建物や建物内の埋焼炉、多量の土師器が確認されたことから、新規の埋蔵文化財包蔵地「片瀬原第2遺跡」と認定した。

市文化財課はこの調査結果を受けて民間事業者と協議。住宅部分は嵩上げなど埋蔵文化財に影響を及ぼさない工法にすることで発掘調査を回避するが、予定地内に作られる道路は恒久施設にあたるため、この部分について本発掘調査を実施することになった。

発掘調査は平成30年2月5日から3月28日にかけて実施した。なお、本発掘調査に係る文書手続きは以下の通りである。

#### 片瀬原第2遺跡

進達文書 平成29年11月24日（宮教文763号1）工事届（文化財保護法第93条）

伝達文書 平成29年12月14日（宮教文763号3）

発掘調査 平成30年2月5日～平成30年3月28日

着手報告 平成30年2月9日（宮教文第891号4）

発見通知 平成30年3月30日（宮教文第891号5）

完了報告 平成30年3月30日（宮教文第891号6）

保管証 平成30年4月5日（宮教文第891号11）

## 第2節 調査の概要

調査地は宅地であり、以前は住宅が1棟建っていたようである。調査範囲は前述の通り、住宅地内の道路部分を対象に設定された。調査区は東西方向に約38m、南北方向に約6mの長方形プランで、北東側の一部分に南北方向に突出する箇所が見られる。今回の発掘調査面積は約268m<sup>2</sup>である。

調査はバックホーによる旧住宅地の表土の剥ぎ取りから始まった。表土層（第①層）が15～50cmほどあり、その下に高原スコリアを含む黒褐色砂質土（第②層）が20～40cm確認された。その下から古代の遺物包含層である暗褐色砂質土（第③層）が30～40cmあった。中世～近世の遺構はこの③層が検出層となった。その下位に古代の遺構検出層である黄褐色砂質土（第④層）が見られた。なお、今回の調査で検出された遺構の床面はこの第④層か、さらにその下位で確認された白色砂質土（第⑤層）であった。第②層については調査区の中央よりやや西側部分だけで確認され、第③層については調査区全域で見つかっている。第③層及び第④層の検出状況から旧地形は南から北へ緩やかに下る状況であったことが推測される。

今回検出された遺構は古代に該当するものが堅穴住居跡26棟、掘立柱建物跡2棟（可能性があるものを含める）、土坑3基、土器埋設遺構2基、溝状遺構1条で、中世～近世にかけてのものが土坑2基と溝状遺構3条である。

調査はジョレン又はネジリ鎌で遺構検出を行い、移植ゴテで遺構埋土の掘削を行った。今回検出された遺構は全て切り合い関係にあり、特に古代の堅穴住居跡については検出時にその新旧関係を把握することができなかった。そのため、土層観察用のあぜを設定した上で、切り合い関係にある堅穴住居跡の埋土を全て一緒に掘り下げ、床面の高低差を確認することで遺構の範囲と数量を把握することとした。部分的には土層断面により新旧関係を把握できた堅穴住居跡もあったが、土層観察でも新旧関係を把握できないものが多くかった。

今回の事業予定地内では調査区以外の部分については発掘調査と並行して一部の造成工事は行われる工程となっていた。調査区の西端部分においては旧住宅のブロック塀が残存しており、調査期間内にブロック塀を取り壊す予定となっていた。ブロック塀の残存範囲は掘削幅が2m以下であったため、ブロック塀を取り壊す際にその区域については立会い調査を行うこととなった。立会い調査では隣接する堅穴住居4・5の平面プランを記録することができた。

## 第Ⅲ章 古代の調査

### 第1節 遺構の調査（第5図～第26図）

前述の通り、検出された全ての竪穴住居跡は複数の切り合い関係にあり、それらの新旧関係が把握できなかったものも多い。そのため、単独の遺構から出土した遺物を把握することが困難な状況であり、複数の遺構に帰属することとなった遺物も数多く存在する。今回の報告に当たっては切り合い関係にある竪穴住居跡を数基づつまとめて行うこととする。

#### 竪穴住居跡4～6

これら3棟は調査区の西端に位置するもので、土層観察からSA4がSA5より新しいことが確認されている。SA6とSA4・5との新旧関係は不明である。後述するSA4の火処からはこの3棟の他にも把握できなかった竪穴住居跡が存在していた可能性も考えられる。なお、SA4・5が重なり合う位置の遺構埋土から須恵器片・土師器片（23～24）、企球型甕の破片などが出土している。

SA4は北側がSA5、東側はSA6と切り合い関係にあり、北東側と南側が調査区外に延びる。その他にも数基の柱穴と切り合い関係が見られる。確認できた範囲では東西方向に4.96m、南北方向に3.76m+aの方形プランのものと推定され、床面から主柱穴が3箇所検出された。また床面の北側には幅0.55～0.65mの壁体溝があり、西側にはカマドの可能性がある焼土を伴う東西方向に0.78m+a、南北方向に1.05m+aの不整形な土坑が見られた。このほかに東側において硬化面が一部検出され、その範囲の中に焼土がまとまって見られた。これについてはSA4の地床炉の可能性と平面プランが把握できなかった別の竪穴住居跡の地床炉であった可能性も考えられる。

遺構埋土からは須恵器片・土師器片（1～11）、土製支脚（12）、棒状鉄製品（13）の他に焼けた尾鈴山酸性岩片、軽石片が出土している。2は土師器壺で低い断面四角形の高台を持ち、壺部と底部の境目には段を有する。7～9は土師器甕の口縁部片である。7は「く」の字状、8は短い「く」の字状、9は逆「L」字状を呈する。10・11は土師器甕の底部片で両者ともに平底で木葉痕が見られる。

SA5は西側から北側が調査区外に延びており、南側がSA4と切り合い関係にある。その他にも数基の柱穴と切り合い関係が見られる。調査区内で確認できた範囲では立会い調査範囲を含めて東西方向に3.49m、南北方向に3.44mの方形プランのものと推定される。また床面からは柱穴が2基検出されたが不規則な並びで主柱穴かどうかは不明である。その他に中央部より西側において硬化面が検出されている。

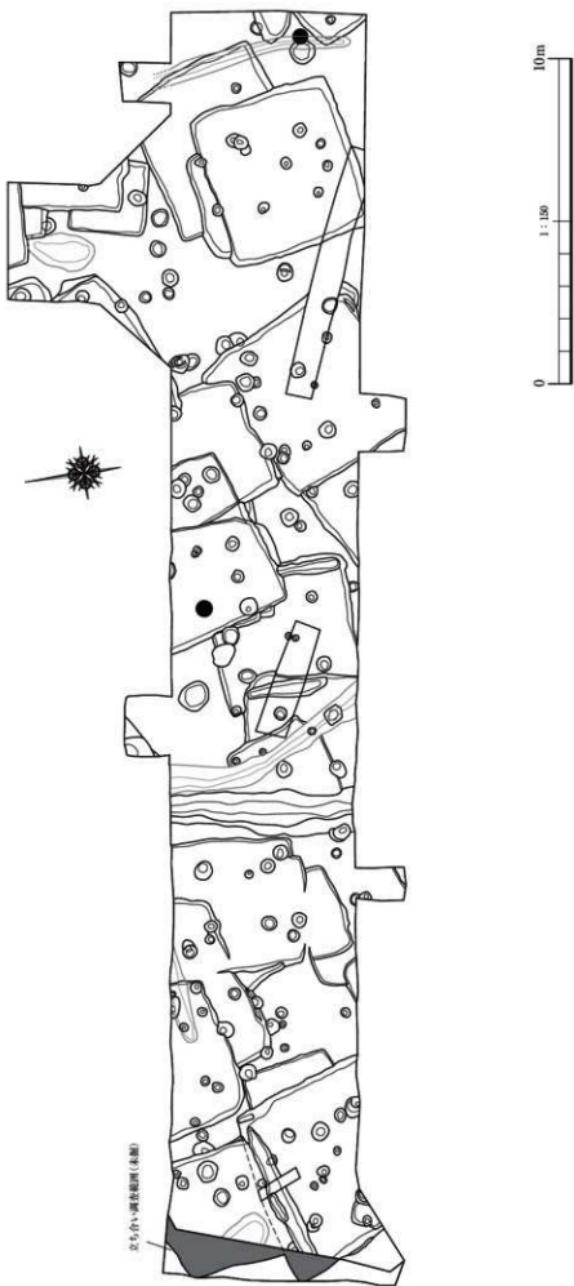
遺構埋土からは須恵器片・土師器片（14～20）、棒状鉄製品（21・22）、軽石片が出土している。15は土師器壺の口縁部片で直線的な体部を呈する。19は甕の口縁部片で、緩やかな「く」の字状を呈している。20は土師器甕の口縁部片である。

SA6は西側がSA4と切り合い関係にあり、また北東部を柱穴に切られている。後述する硬化面がSA4を境目に消失していたことを考慮するとSA4の方が新しい可能性が考えられる。確認できた範囲では南北方向に2.73m、東西方向に0.72m+aの方形プランのものと推定される。床面からは柱穴は検出されず、硬化面が部分的に確認されている。

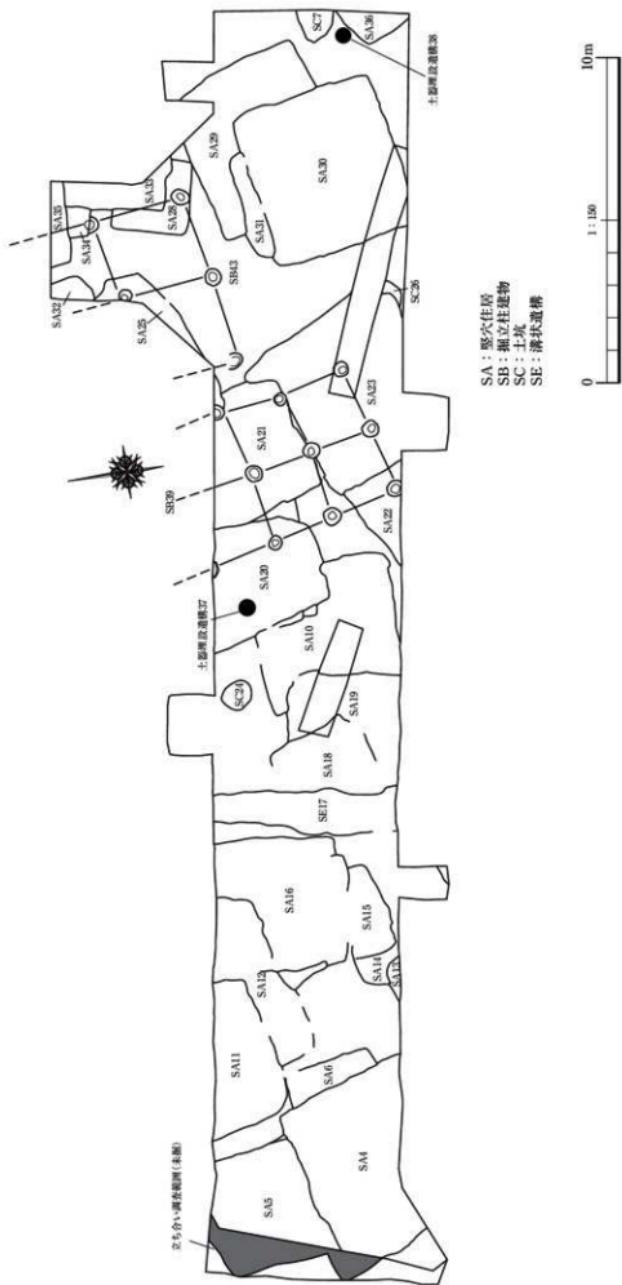
遺構埋土からは土師器片が出土したが、団化に耐えうるものはなかった。

#### 竪穴住居跡11～16

これらの6棟はSA4～6の東側に位置する。SA11・12と比較するとSA13～16は切り合い関係が複雑で竪穴の残存状況が悪く、それらの新旧関係は把握できなかった。また後述するように幾つかの竪穴住居跡から不規則に複数の火処が見られることや、竪穴住居跡のコーナー部分と考えられる痕跡



第3图 片湖原第2道场全体遭捕配置图 ( $S = 1/150$ )



第4図 片瀬原第2遺跡古代主要溝渠配置図 (S = 1/150)

が検出されたことから、これらの他にも把握できなかった竪穴住居跡が存在していた可能性も考えられる。なお、SA11・12については土層観察によってSA11の方が新しいことが確認されている。またSA11・12及びSA12・15・16が重なり合う位置の遺構埋土から須恵器片・土師器片(44~48)、布痕土器片などが出土している。

SA11は北側が調査区外に延びており、南側がSA12と切り合い関係にある。その他にも数基の柱穴と切り合い関係が見られる。確認できた範囲では東西方向に4.28m、南北方向に $2.36m + a$ の方形プランのものと推定される。床面中央よりやや南側に主柱穴が2基検出され、また北側の調査区境界付近には焼土が見られた。これは本遺構の地床炉と考えられる。

遺構埋土からは須恵器片・土師器片(25~31)、軽石片が出土している。27・28は土師器甕の口縁部片である。27は「く」の字状、28は短い口縁で屈曲も弱く、端部は丸い。30・31は土師器甕の底部片である。30は平底で木葉痕がみられ、31は丸底状を呈する。

SA12は北西側がSA11、南東側はSA16と切り合い関係にあり、北東側は調査区外に延びている。その他にも数基の柱穴と切り合い関係が見られる。確認できた範囲では東西方向に5.16m、南北方向に $1.9m + a$ の方形プランのものと推定される。床面中央よりやや南側に主柱穴が2基検出され、また本遺構に伴うものは不明だが南側の立ち上がり付近に2箇所の焼土のまとまりがみられた。

遺構埋土からは須恵器片・土師器片(32~38)、棒状鉄製品(39)、軽石片が出土している。32・33は須恵器蓋の破片である。32は扁平な宝珠状のつまみを有する。33は口縁端部にかえりが見られる。36・37は土師器甕の底部片で上げ底状を呈している。38は土師器甕の底部片で、棧渡しの孔が見られる。

SA13は調査区の南端で検出され、方形の竪穴住居跡の北東側コーナー部分のみが確認された状況で南側の大半が調査区外に延びている。北東側はSA14と切り合い関係にある。確認できた範囲では東西方向に $0.77m + a$ 、南北方向に $0.45m + a$ の規模を呈する。

確実に本遺構に伴うと考えられる遺物は今回の調査では得られなかった。

SA14は方形の竪穴住居跡の北西側コーナー部分と南側の立ち上がり部分の一部が確認された。また南西側はSA13、東側がSE17と切り合い関係にある。その他にも数基の柱穴と切り合い関係が見られる。確認できた範囲では東西方向に $2.75m + a$ 、南北方向に $3.43m$ の規模を呈する。床面からは柱穴が1基と東側に焼土が検出されたが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。

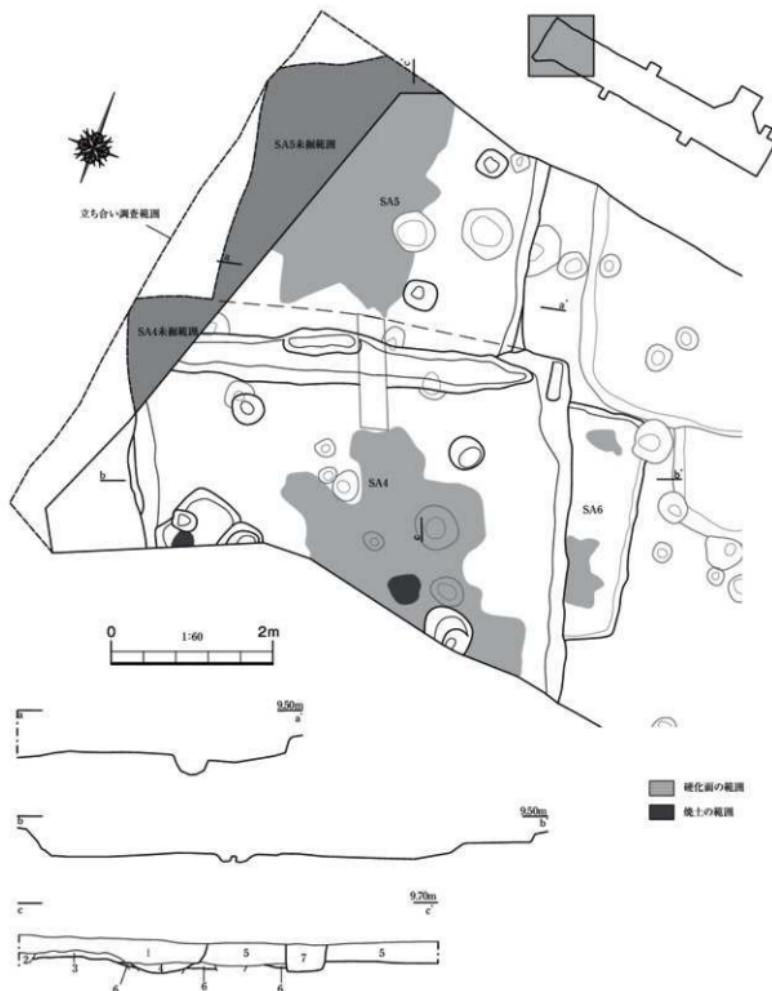
遺構埋土からは土師器片、軽石片が出土したが、図化に耐えうるものはなかった。

SA15はSA14と重なり合っており、北側がSA16と切り合い関係にある。確認できた範囲では東西方向に2.62m、南北方向に $1.26m + a$ の方形プランのものと推定される。南側の立ち上がり部分に焼土が検出されたが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。

遺構埋土からは土師器片、軽石片が出土したが、図化に耐えうるものはなかった。

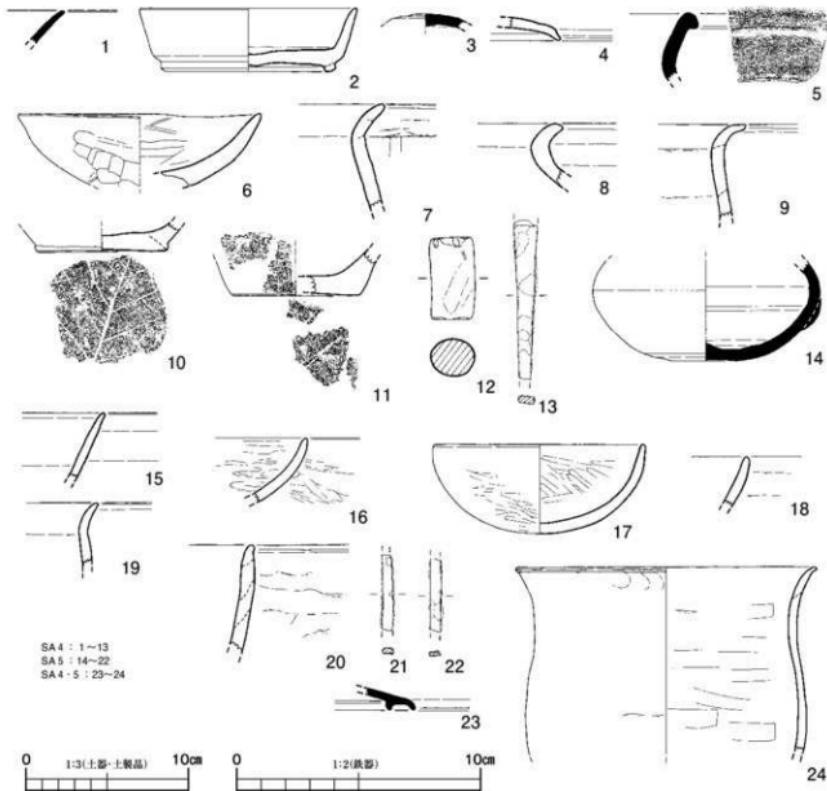
SA16は北西側がSA12、南側はSA15と切り合い関係にあり、北東側は調査区外に延びている。その他にも数基の柱穴と切り合い関係が見られる。確認できた範囲では東西方向に3.91m、南北方向に $3.7m + a$ の方形プランのものと推定される。床面からは4基の主柱穴が確認され、主柱穴間の中央付近に焼土が広範囲に見られ地床炉の痕跡と考えられる。その他にも北東部に一箇所焼土が確認されている。こちらは本遺構に伴うものは不明である。なお、西側と南側の立ち上がり部分にわずかに竪穴住居跡のコーナー部分を想定させる段差が確認されたことから、平面プランが把握できていない竪穴住居跡が周間に複数存在していた可能性が考えられる。

遺構埋土からは土師器片(40~43)、軽石片が出土している。42は土師器甕の口縁部片で「く」の字状を呈し、端部は丸い。43は土師器甕の底部片で平底を呈し木葉痕が見られる。



- 1 : 暗褐色砂質ローム層 (Hue75YR3/3) SA4理土。軟らかく、しまりは弱め。
- 2 : 暗褐色砂質ローム層 (Hue10YR3/3) SA4柱穴理土。軟らかく、しまりは弱い。
- 3 : 褐色砂質ローム層 (Hue10YR4/4) SA4理土。軟らかく、しまりは弱い。地山の砂ブロックを僅かに含む。
- 4 : 灰黃褐色砂質ローム層 (Hue10YR4/2) SA4理土。軟らかく、しまりは弱い。地山の青砂ブロックを僅かに含む。壁体溝の理土。
- 5 : 暗褐色砂質ローム層 (Hue10YR3/3) SA5理土。軟らかく、しまりは弱い。地山の砂ブロックを僅かに含む。
- 6 : 暗褐色砂質ローム層 (Hue10YR3/4) SA5理土。軟らかく、しまりは弱い。地山の砂を含む。
- 7 : 暗褐色砂質ローム層 (Hue10YR3/3) 柱穴理土。軟らかく、しまりは弱い。

第5図 SA 4 ~ 6 実測図 ( $S = 1/60$ )



第6図 SA 4・5出土遺物実測図 (土器・土製品 S = 1/3、鉄器 S = 1/2)

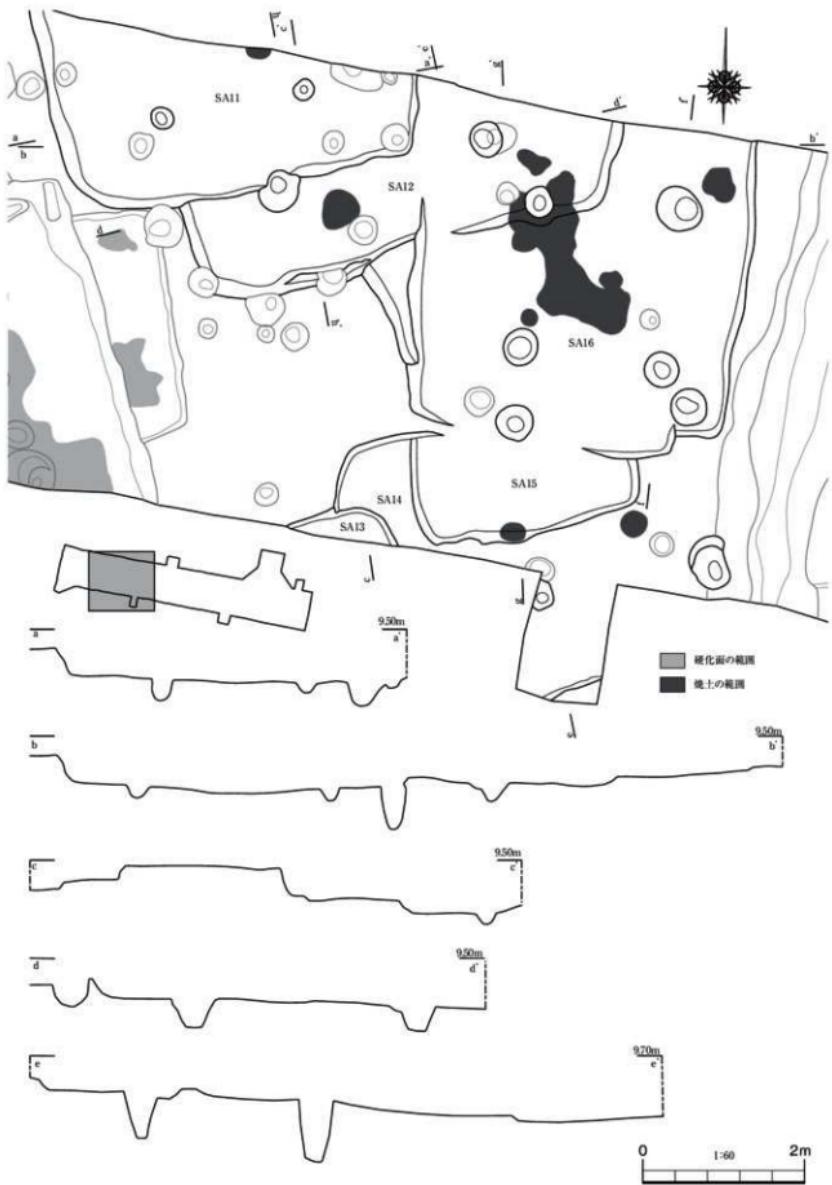
#### 溝状遺構17

SE17はSA16の東側に位置する。南北方向に調査区外まで延びる幅0.8~1.3mの断面逆台形状の溝状遺構で、検出面からの深さは0.53mであった。東側はSA18と切り合い関係にあるが土層観察の結果、SA18より新しいことが確認されている。

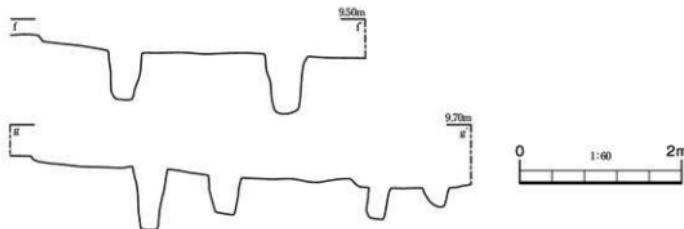
遺構埋土からは須恵器片・土師器片(63~66)、軽石片が出土している。63は須恵器壺の底部片で高台が付いた丸みを帯びた形態を呈する。65・66は土師器壺の口縁部片である。65は短い「く」の字状を呈する。66はあまり屈曲が見られず、端部は先細りで外面には輪積み痕が見られる。

#### 竪穴住居跡10・18・19

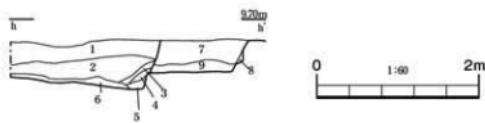
これらはSE17の東側にあり、調査区の概ね中央部に位置する竪穴住居跡である。なお、これらの新旧関係は遺構検出時及び土層観察でも把握することができなかった。またSA10・19・20が重なり合う位置の遺構埋土から須恵器片・土師器片(67~71)が出土している。



第7図 SA11～16実測図 ( $S = 1/60$ )



第8図 SA11~16断面図 (S=1/60)



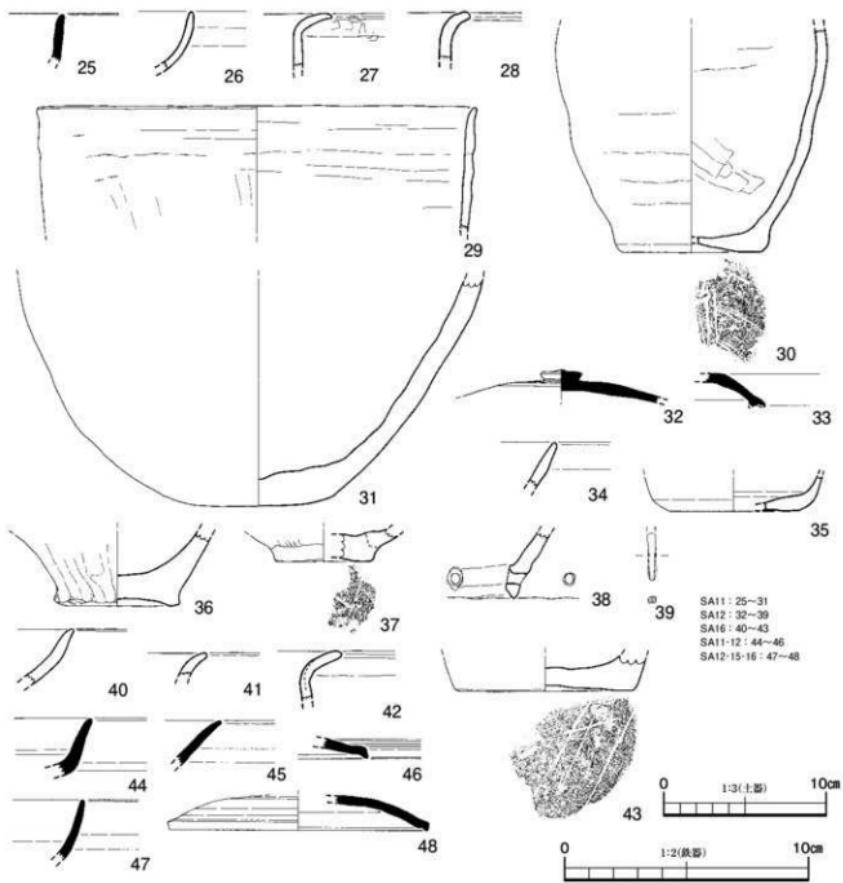
- 1 : 暗褐色砂質ローム層 (Hue75YR3/4) SA11埋土。軟らかく、しまりは弱い。炭化物粒、地山の砂粒を少量含む。
- 2 : 黒褐色砂質ローム層 (Hue75YR3/2) SA11埋土。軟らかく、しまりは弱い。白色砂粒、マンガン粒、地山の砂粒を少量含む。
- 3 : 暗褐色砂質ローム層 (Hue10YR3/4) SA11埋土。軟らかく、しまりは弱い。地山の砂粒を少量含む。
- 4 : にぶい黄褐色砂質ローム層 (Hue10YR4/3) SA11埋土。軟らかく、しまりは弱い。地山の砂ブロックを少量含む。
- 5 : オリーブ褐色砂質ローム層 (Hue25YR4/3) SA11埋土。軟らかく、地山の砂ブロックを多く含む。
- 6 : 暗褐色砂質ローム層 (Hue75YR3/3) SA11貼床。硬く、しまりは弱い。地山の砂ブロックを含む。
- 7 : 黑褐色砂質ローム層 (Hue10YR3/3) SA12埋土。軟らかく、しまりは弱い。白色砂粒、地山の砂ブロックを少量含む。
- 8 : 灰黄褐色砂質ローム層 (Hue10YR4/2) SA12埋土。軟らかく、しまりは弱い。地山の砂粒を多く含む。
- 9 : 暗オリーブ褐色砂質ローム層 (Hue25YR3/3) SA12貼床。硬く、しまりは強い。地山の砂ブロックを多く含む。

第9図 SA11-12土層図 (S=1/60)

SA10は西側がSA19、北東側がSA20と切り合い関係にある。またその他にも数基の柱穴と切り合ひ関係が見られる。確認できた範囲では東西方向に3.93m、南北方向に4.14mの方形プランのものと推定される。床面からは主柱穴が4基検出され、東側には幅0.35~0.4mの壁体溝が確認された。また中央部において焼土は検出されなかったが、炭化物を少量含むことから地床炉の跡とも考えられる浅い掘り込みと土器埋設遺構（第13図）が並んで検出された。この土器埋設遺構は掘り込みから土師器甕の口縁部付近が露出する程度の深さを呈していた。本遺構はその掘り込みや周辺部に焼土や炭化物を明瞭には伴わなかったが、掘り込みから出土した土師器甕（49）を観察すると口縁部付近に二次的な焼成を受けている様子が見られるので、SA10の火廻として使用されたものであろう。なお、49は端部が先細りの屈曲の著しい逆「L」字状の口縁部を呈し、木葉痕が見られる平底の形態のものである。これらの他に床面の南東部に硬化面が検出された。

この他に遺構埋土からは須恵器片・土師器片（50~57）、軽石片が出土している。50・51は須恵器蓋の口縁部片で端部にかえりが見られる。53は須恵器甕の胴部片で内面に同心円状の當て具痕が確認される。57は土師器甕の底部片で棟渡しの孔が見られる。

SA18は西側がSE17、中央よりやや東側をSE9に切られている。その他にも数基の柱穴と切り合ひ関係が見られる。確認できた範囲では東西方向に2.52m + a、南北方向に2.65mの方形プランのものと推定される。床面中央部よりやや北東部と南西部に焼土の広がりが確認されたが、本遺構に伴うもののかは不明である。



第10図 SA11・12・15・16出土遺物実測図（土器 S=1/3、鉄器 S=1/2）

遺構埋土からは須恵器片・土師器片（58～61）が出土している。58は須恵器蓋の破片で、外面の調整は回転ナデである。60は土師器壺の口縁部で、注ぎ口のような形状を呈している。

SA19は西側がSE17とSA18、東側はSA10と切り合い関係にあり、また中央部付近はSE9に切られている。なお南側は調査区外に延びており、確認できた範囲では東西方向に3.3m + a、南北方向に3.4m + a の方形プランのものと推定される。本遺構の床面及びSE9の床面から主柱穴が4基、その主柱穴の間に本遺構に伴う土器埋設遺構の掘り込みと考えられるものが1基検出されている。その他にSA10との境目付近に幅0.3～0.5mの壁体溝が検出されたが、平面上の位置関係からはSA10の施設の可能性も考えられる。

遺構埋土からは土師器片（62）が出土している。

## 竪穴住居跡20～23・土坑26

これらはSA10の東側に位置する。後述するようにこれらの周間に竪穴住居跡のコーナー部分と考えられる痕跡が検出されたことや、土器埋設遺構37の存在から他にも把握できなかった竪穴住居跡が存在していた可能性も考えられる。なお、この4基の新旧関係については遺構検出時及び土層観察でも把握することができなかった。またSA20・21・23が重なり合う位置の遺構埋土から須恵器片・土師器片（105～108）が出土している。

SA20は南西側がSA10、東側はSA21と切り合い関係にあり、その他にも数基の柱穴と切り合い関係が見られる。また北側は調査区外に延びている。南西部から南部にかけては竪穴住居跡のコーナー部分を想定させるようなプランが複数見られたことから、平面プランが把握できていない竪穴住居跡が周囲に複数存在していた可能性が考えられる。確認できた範囲では東西方向に5.04m、南北方向に3.8m +  $a$  の方形プランのものと推定される。床面からは主柱穴が2基検出され、その北側には土器埋設遺構1基（第18図左側）とそれと隣接して地床炉と考えられる埋土に焼土を含む埴込みが1基検出された。また土器埋設遺構は土師器壺（74）の底部付近が埋設される程度の掘り込みであった。その掘り込みから出土した土器（73・74）には2次焼成の痕跡は見られなかつたが、遺構の周囲には焼土が分布していることから本遺構もSA20の火廻と考えられる。なお、73は74の内側に混入していた土師器の口縁部片であり、74とは同一個体のものと推定される。73はほとんど屈曲が見られない端部を丸くするものである。74は平底で木葉痕が見られる。

この他に遺構埋土からは須恵器片・土師器片（76～85）、棒状鉄製品（87）、敲石（86）、軽石片、頁岩製剥片などが出土している。78は須恵器蓋の破片で、端部にかえりが見られる。82は小型の土師器壺である。86は砂岩製である。

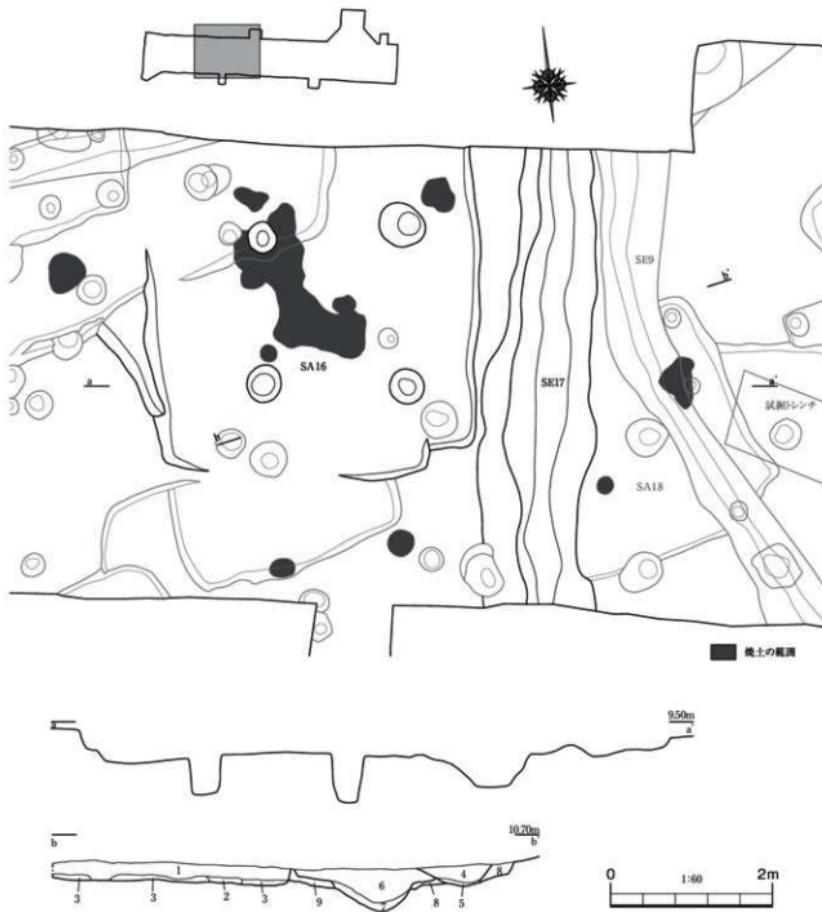
SA21は西側がSA20、南側はSA23、北東側はSA25と切り合い関係にあり、その他にも数基の柱穴と切り合い関係が見られる。また北側は調査区外に延びている。確認できた範囲では東西方向に3.65m、南北方向に3.55m +  $a$  の方形プランのものと推定される。なお、南側壁面付近で口縁部を4分の1ほど欠損する土師器壺（72）が出土した（第16・17図）。72は丸底で口縁部が直口し、その端部は先細りする形体を呈する。また底部には「×」状のヘラ記号が見られる。このほかには本遺構に伴うと考えられる施設は検出されなかつた。

遺構埋土からは須恵器片・土師器片（88～96）、棒状鉄製品（97）、砥石片、軽石片が出土している。88・89は須恵器壺の破片である。両者ともに低い高台を呈し、底部と高台の間に段を持つ。90・91は須恵器蓋の破片である。90は端部にかえりがなく、91にはかえりが見られる。96は土師器壺の口縁部から胴部の破片である。口縁部は逆「L」字状を呈し、端部は先細りするもので、胴部内面に輪積み痕が見られる。97は本遺跡で最も大きな鉄製品である。断面は四角形で刃部は見られない。また先端はやや先細りしている。

SA22は東側がSA23と切り合い関係にあり、その他にも数基の柱穴と切り合い関係が見られる。また西側の大半は調査区外に延びている。東西方向に2.78m +  $a$  、南北方向に1.87m +  $a$  の床面の範囲は確認できたが、コーナー部分を検出することができなかつたので平面プランは不明瞭のままである。床面からは本遺構に伴うと考えられる施設は検出されなかつた。

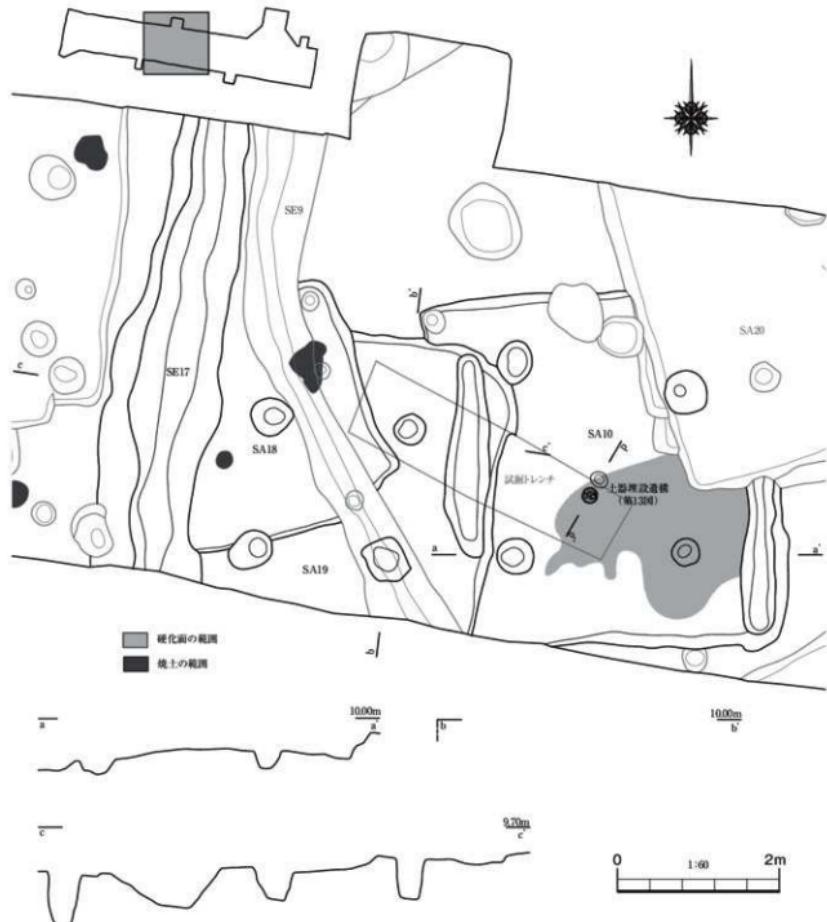
遺構埋土からは土師器片が出土したが、図化に耐えうるものはなかつた。

SA23は北側がSA21、西側はSA22、その他にも数基の柱穴と切り合い関係が見られる。また南側は調査区外に延びている。確認できた範囲では東西方向に4.73m、南北方向に4.8m +  $a$  の方形プランのものと推定される。なお、試掘トレンチに切られていたため、新旧関係や平面プランは不明瞭となつてゐるが、南東方向に張り出す箇所を埋土掘削中に確認した。この部分については一応SA23とは別

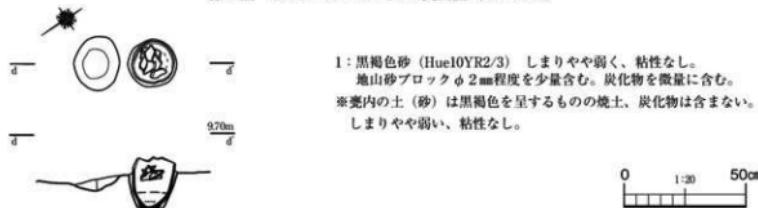


- 1 : 暗褐色砂質ローム層 (Hue7.5YR3/3) SA16埋土。粘性弱い。しまりは弱い。
- 2 : 暗褐色砂質ローム層 (Hue10YR3/3) SA16柱穴埋土。粘性弱い。しまりは弱い。地山の砂を僅かに含む。
- 3 : にぶい黄褐色砂質ローム層 (Hue10YR4/3) SA16埋土。粘性弱い。しまりは弱い。
- 4 : 黑褐色砂質ローム層 (Hue10YR3/2) SE9埋土。粘性やや弱い。しまりは弱い。
- 5 : にぶい黄褐色砂質ローム層 (Hue10YR4/3) SE9埋土。粘性弱い。しまりは弱い。SA18埋土と地山の砂を含む。
- 6 : 暗褐色砂質ローム層 (Hue10YR4/3) SE17埋土。粘性弱い。しまりは弱い。
- 7 : にぶい黄褐色砂質ローム層 (Hue10YR4/3) SE17埋土。粘性弱い。しまりは弱い。地山の砂を含む。
- 8 : 黄褐色砂質ローム層 (Hue2.5YR5/4) SA18埋土。粘性なし。しまりは弱い。地山の砂を多く含む。
- 9 : にぶい黄褐色砂質ローム層 (Hue10YR5/4) SA18埋土か。粘性弱い。しまりは弱い。地山の砂を含む。

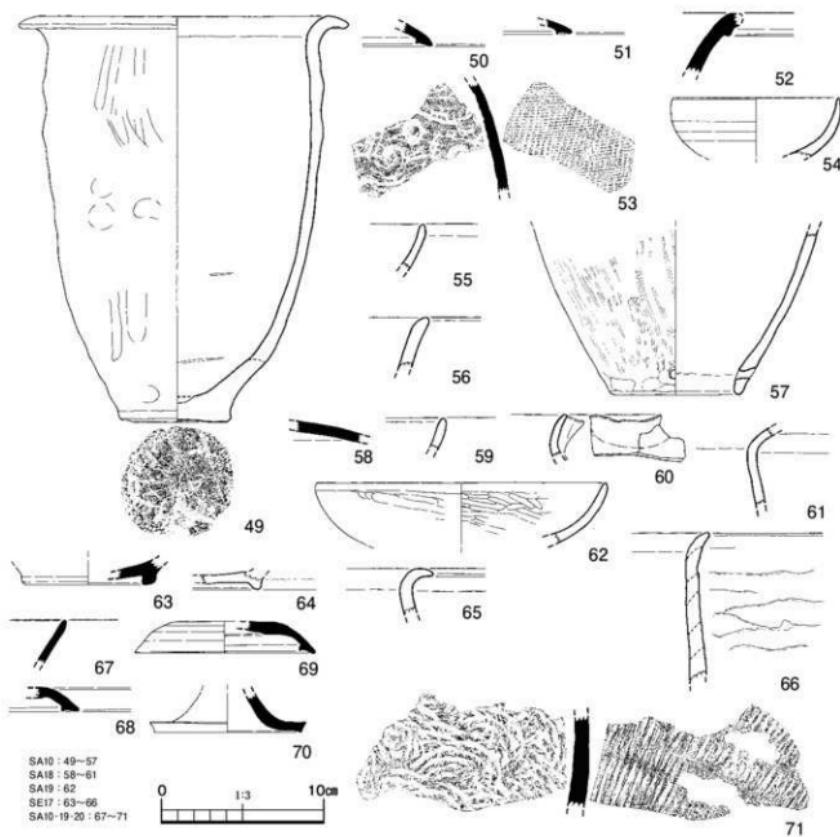
第11図 SA16・SE17実測図 (S = 1/60)



第12図 SA10・18・19・SE17実測図 (S = 1/60)



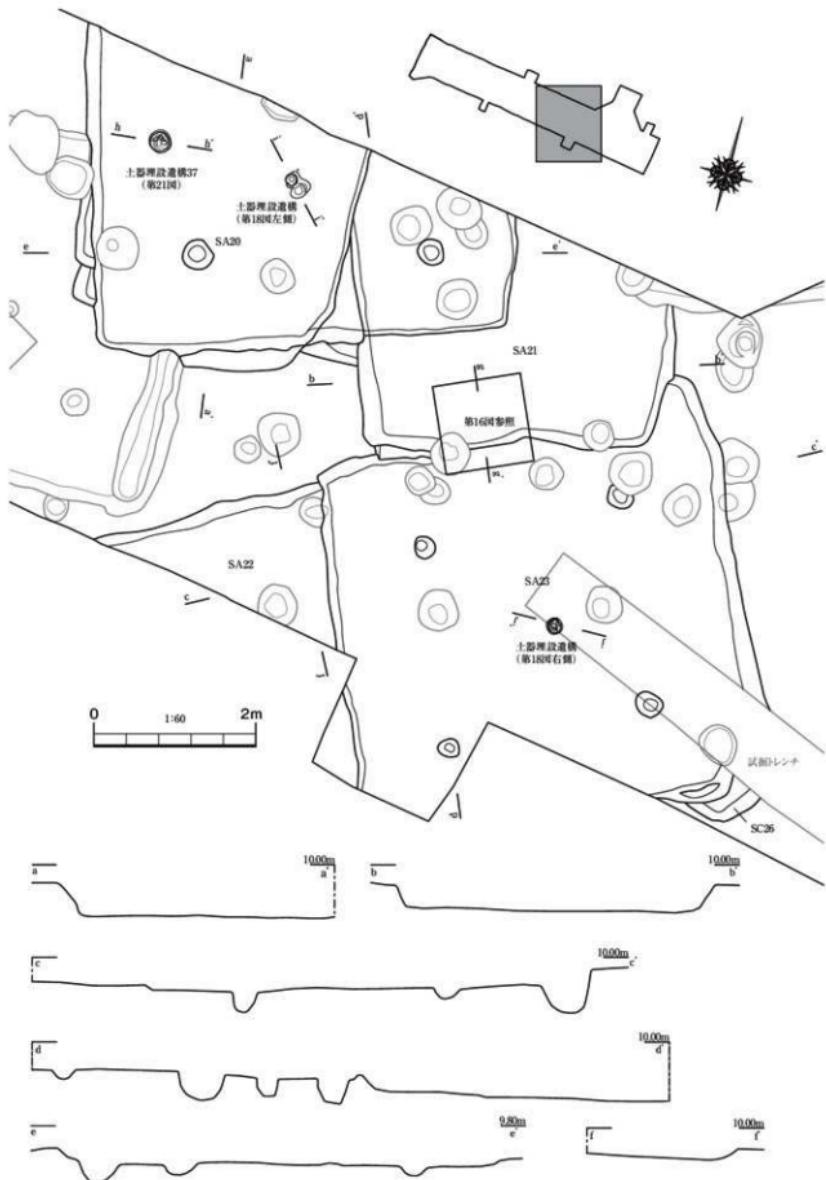
第13図 SA10土器埋設遺構実測図 (S = 1/20)



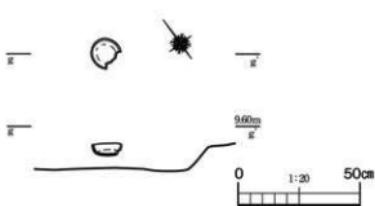
第14図 SA10-18~20-SE17出土遺物実測図 (S = 1/3)

の土坑 (SC26) と考えて後述する。床面からは主柱穴が4基検出され、中央部付近には土器埋設構 (第18図右) が検出された。土器埋設構は土師器甕 (75) が底部から胴部の途中まで埋設する程度の掘り込みを呈していた。本遺構の周辺や掘り込み内部に焼土は明瞭に確認されなかったものの、出土した土師器甕の内部には少量の炭化物とやや赤化した砂が認められたことからSA23の火處と考えられる。75は土師器甕で口縁部は残存していないかった。胴部上半部から口縁部にかけて縮まっていく形態を呈し、内面には輪積み痕が見られる。また底部は平底で木葉痕が観察される。

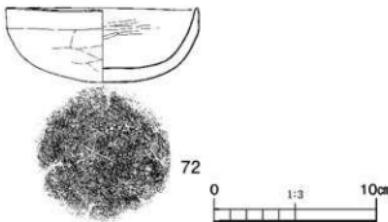
この他に遺構埋土からは須恵器片・土師器片 (98~102)、打製石器 (103)、軽石片が出土している。102は布痕土器の破片である。103はチャート製で五角形縫に分類される。平面形状からは縄文時代後期に多い資料であり、本遺構に伴わないものと考えられるが、本遺跡の立地する第1砂丘の形成時期を推定させる資料ともいえる。



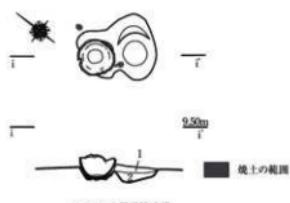
第15図 SA20~23・SC26実測図 ( $S = 1/60$ )



第16図 SA21南側壁面土器碎片出土状況図 (S = 1/20)



第17図 SA21南側壁面出土碎片実測図 (S = 1/3)

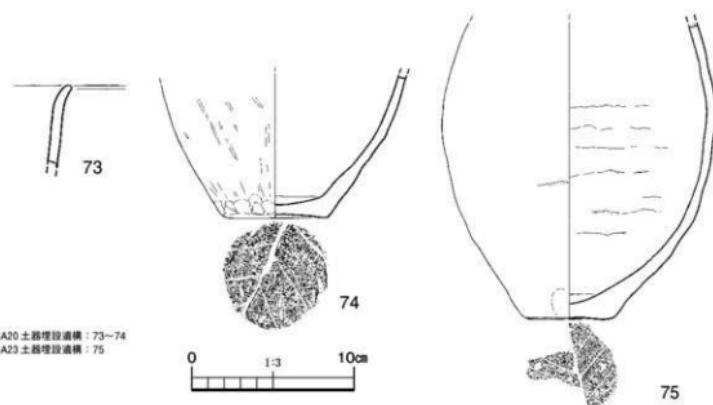


1 : 黒褐色砂 (Hue10YR2/3) しまりやや弱い、粘性なし。  
燒土ブロックを少量含む。

2 : 1層に地山砂が混じる。  
※壺内の土（砂質土）はしまりがあり、黒褐色を呈するもの  
の焼土は含まれない。

壺内の炭化物を少量含む焼土（砂）がやや赤変しているが、  
内外共に明瞭な焼土は検出されなかった。

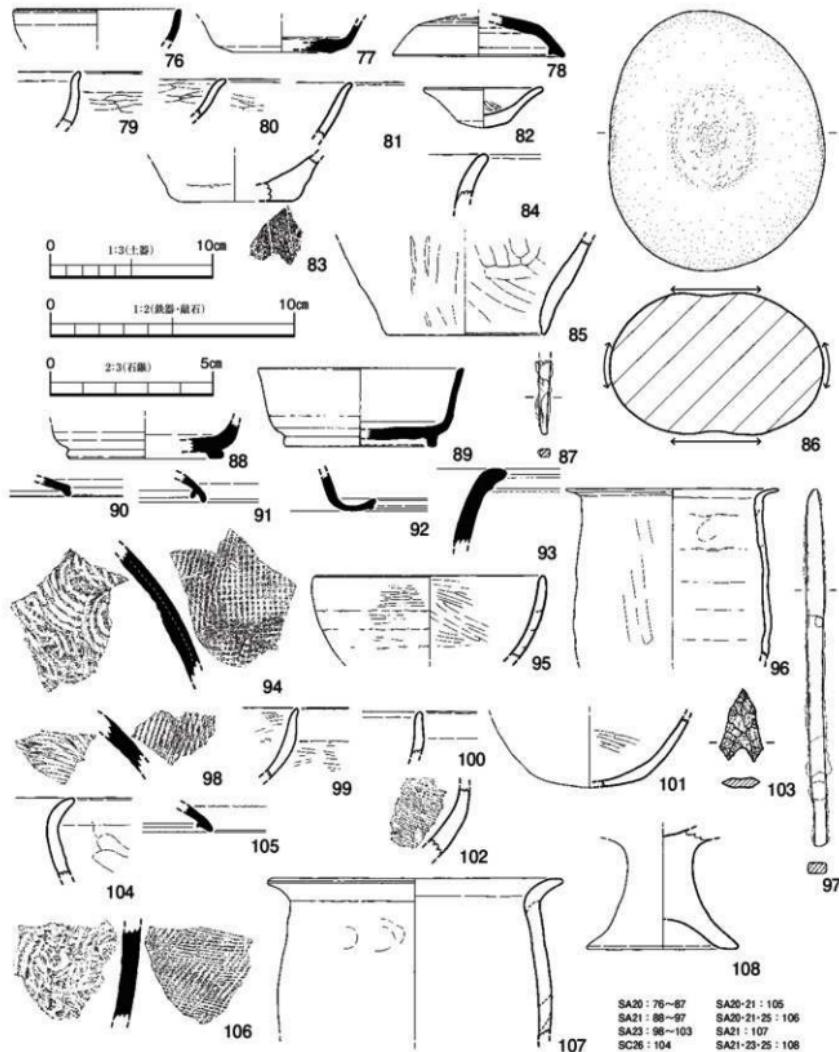
第18図 SA20-23土器埋設遺構実測図 (S = 1/20)



SA20土器埋設遺構：73～74  
SA23土器埋設遺構：75

第19図 SA20-23土器埋設遺構出土遺物実測図 (S = 1/3)

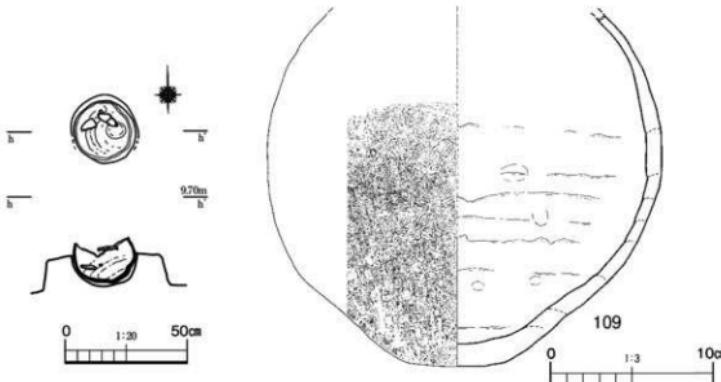
SC26は前述の通りSA23の南東部で検出された素掘りの土坑である。切り合い関係を把握できない状況で掘削を行ってしまったため平面形は不明瞭だが、南西北東方向に1.5m + a、南東北西方向に0.3m + aの隅丸長方形状を呈していたものと考えられる。



第20図 SA20-25・SC26出土遺物実測図（土器 S = 1/3, 石器 S = 2/3, 鉄器・敲石 S = 1/2）

造構埋土からは土師器片（104）が出土している。104は「く」の字状を呈して端部を丸く整える土師器壺の口縁部片である。

SA20 : 76-87	SA20-21 : 105
SA21 : 88-97	SA20-21・25 : 106
SA23 : 98-103	SA21 : 107
SC26 : 104	SA21-25-25 : 108



第21図 土器埋設遺構37実測図 ( $S = 1/20$ ) 及び出土遺物実測図 ( $S = 1/3$ )

### 土器埋設遺構37

土器埋設遺構37はSA20堅穴内の西側で検出された。SA20に伴わない遺構と判断した理由は、SA20の埋土掘削時に床面からやや浮いた状態で検出されたためである。なお、土師器壺(109)を埋設していた掘り込みについては遺構検出時及び土層観察でも確認することができなかった。109は口縁部が残存しておらず、やや西側に傾いた状況で出土した。表面には二次的な焼成は確認されておらず、遺物の周辺からも焼土や炭化物は検出されなかつたので本遺構の機能は不明である。

109は土師器壺で前述のとおり口縁部は残っていなかった。底部は丸底状で胴部上半部から口縁部にかけて縮まっていく形体である。胴部内面には輪積み痕が見られる。

### 堅穴住居跡25・28・32~35

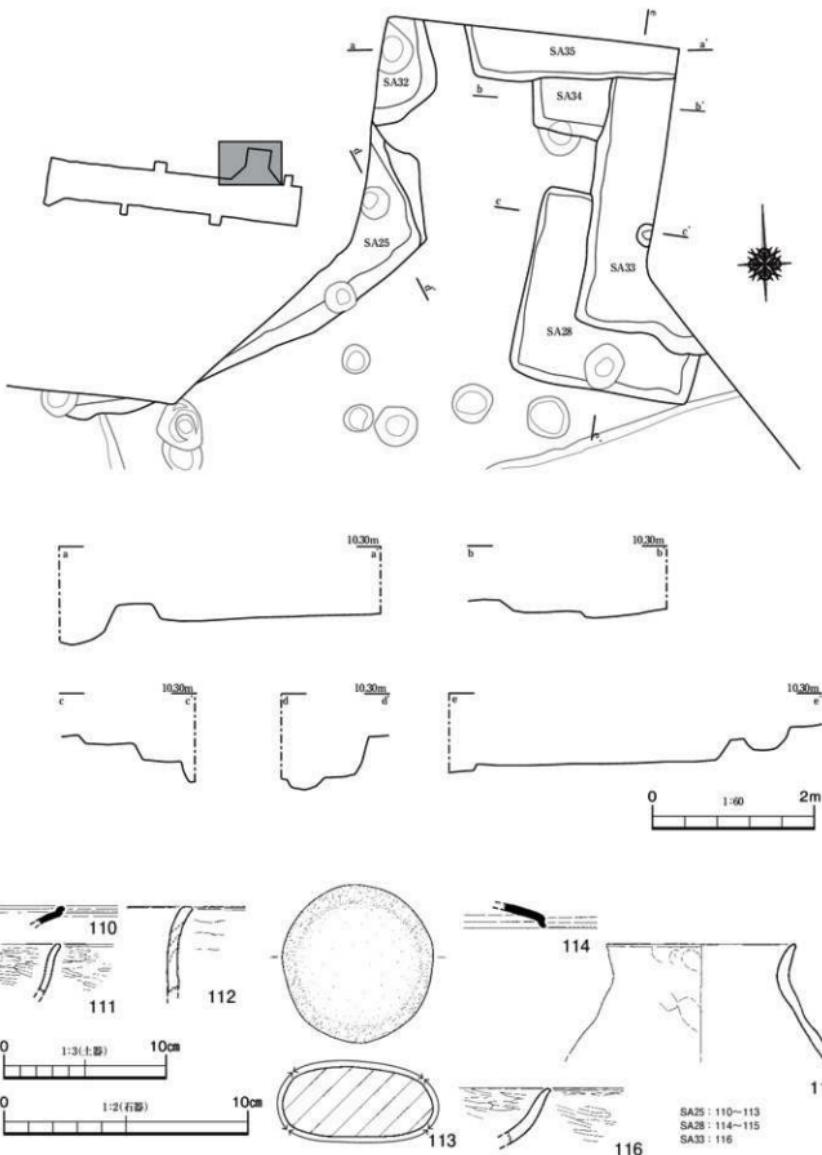
これらの堅穴住居跡は調査区東側の北方向に突出する箇所で検出された。SA28以外は方形の堅穴住居跡のコーナー部分だけが検出された状況である。大きさはSA25とSA32の切り合い関係とSA28とSA33~35の2つの塊に分かれる。なおこれらの新旧関係については遺構検出時及び土層観察でも把握することができなかった。これらの遺構が重なり合う位置の遺構埋土から須恵器片・土師器片、布痕土器片などが出土している。

SA25は南西側がSA21、北東側はSA32と、その他にも数基の柱穴と切り合い関係が見られる。また北西側の大半の部分は調査区外に延びている。確認できた範囲では北東南西方向に4.63m+a、北西南東方向に1.29m+aの方形プランのものと推定される。

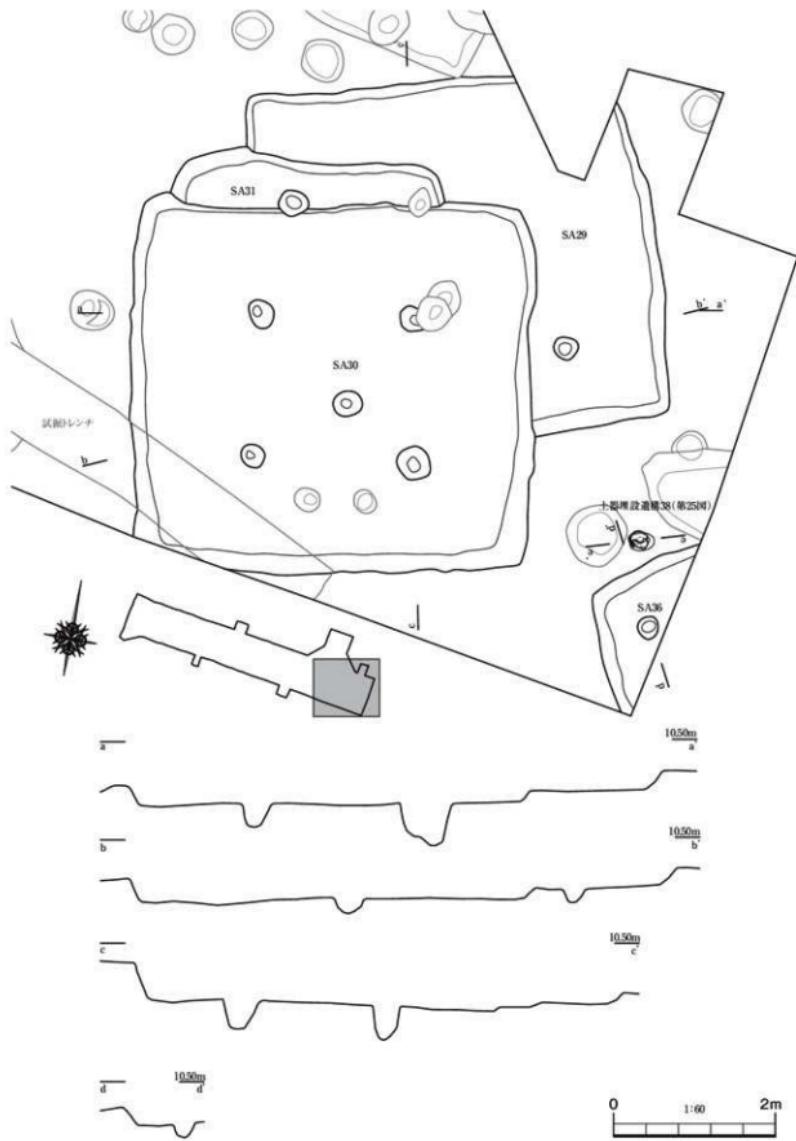
遺構埋土からは須恵器片・土師器片(110~112)、磨石(113)が出土した。110は須恵器の口縁部片で、端部付近には沈線が見られる。小片のため器種がはっきりしないが、高坏の口縁部片と分類した。他には蓋の可能性も考えられる。113は敲打痕もみられることから敲石との兼用品である。

SA28はSA25の東側にあって、北東方向がSA33と切り合い関係にあり、その他にも柱穴1基と切り合い関係が見られる。確認できた範囲では東西方向に2.06m、南北方向に2.16mの方形プランのものと推定される。

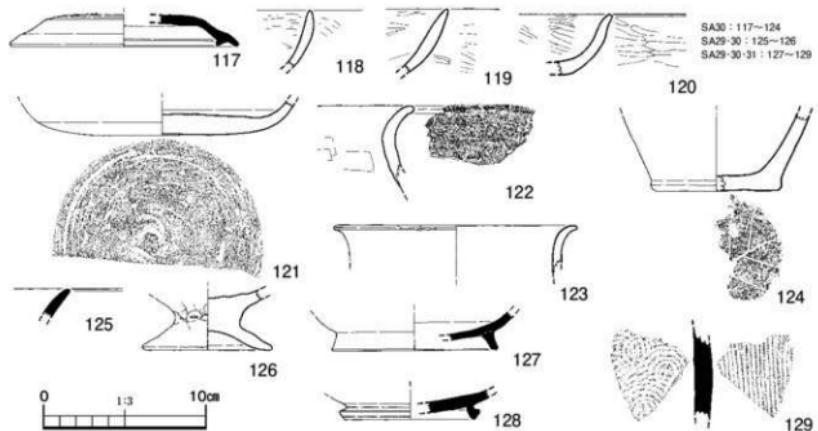
遺構埋土からは須恵器片・土師器片(114~115)が出土している。114は須恵器蓋の口縁部片で端部にはかえりが見られない。115は土師器壺の口縁部から胴部の破片である。「く」の字状を呈し、屈曲部より下は大きく広がる形体を呈する。



第22図 SA25・28・32～35実測図 ( $S=1/60$ ) 及び出土遺物実測図 (土器  $S=1/3$ 、石器  $S=1/2$ )



第23図 SA29~31・36実測図 ( $S=1/60$ )

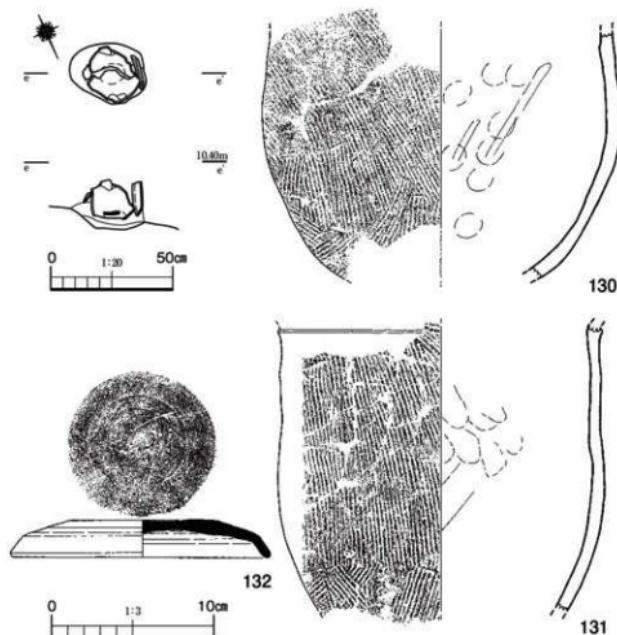


第24図 SA29~31出土遺物実測図 (S=1/3)

SA32は方形の竪穴住居跡の南東側コーナー部分だけが確認された状況であった。南西方向にSA25と、その他にも柱穴1基と切り合い関係が見られる。また北側から東側にかけての大半の部分は調査区外に延びている。確認できた範囲では東西方向に0.64m +  $\alpha$ 、南北方向に1.06m +  $\alpha$ の規模を呈する。

遺構埋土からは土師器片などが出土したが、図化に耐えうるものはなかった。

SA33は方形の竪穴住居跡の南西側コーナー部分とそこから北側に延びる壁面の一部が確認された状況であった。北側を



第25図 土器埋設遺構38 (S=1/20) 及び出土遺物実測図 (S=1/3)

SA34・35と切り合い関係にあり、東側の大半の部分は調査区外に延びている。

確認できた範囲では東西方向に $1.37m + a$ 、南北方向に $2.97m + a$ の規模を呈する。床面からは柱穴が1基検出された。

遺構埋土からは土師器片（116）、軽石片が出土している。

SA34は方形の竪穴住居跡の南西側コーナー部分だけが確認された状況であった。北側をSA35、東側をSA33と切り合い関係にあり、その他にも柱穴1基と切り合い関係にある。確認できた範囲では東西方向に $0.7m + a$ 、南北方向に $0.9m + a$ の規模を呈する。

遺構埋土からは土師器片、軽石片が出土したが、図化に耐えうるものはなかった。

SA35は方形の竪穴住居跡の南西側コーナー部分とそこから東側に延びる壁面の一部が確認された状況であった。南側がSA33・34と切り合い関係にある。北から東側の大半が調査区外に延びている。確認できた範囲では東西方向に $2.44m + a$ 、南北方向に $0.52m + a$ の規模を呈する。

遺構埋土からは土師器片が出土したが、図化に耐えうるものはなかった。

#### 竪穴住居跡29～31・36

これらは調査区の東端で検出された竪穴住居跡である。SA29～31は切り合い関係にあるが、これらの新旧関係については遺構検出時及び土層観察においても確認することができなかった。なお、後述する土器埋設遺構38の存在からこれらの他にも把握できなかった竪穴住居跡が存在していた可能性も考えられる。またSA29～31が重なり合う位置の遺構埋土から須恵器片・土師器片（125～129）砥石片などが出土している。

SA29はSA28の南側に位置しており、南西部がSA30・31と、その他にも数基の柱穴とも切り合い関係にある。確認できた範囲では東西方向に $4.45m$ 、南北方向に $4.15m$ の方形プランのものが推定される。床面からは主柱穴が3基検出された。そのうちの1基はSA30の床面中央部から、もう1基はSA31の床面から検出されたものである。

遺構埋土からは土師器片、軽石片が出土したが、図化に耐えうるものはなかった。

SA30は北側から東側にかけてSA29・31と、その他にも数基の柱穴と切り合い関係にある。南西側コーナー部分だけが調査区外に延びているが、本遺構は今回の調査で唯一全体の規模を把握することができた竪穴住居跡である。なお確認できた範囲では東西方向に $4.57m$ 、南北方向に $4.24m$ の方形プランを呈する。床面からは主柱穴が4基検出されたが、火廻と考えられる遺構は検出されなかった。

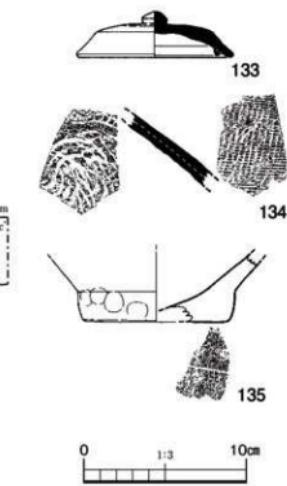
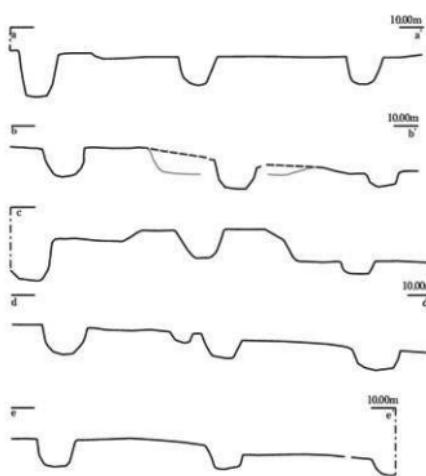
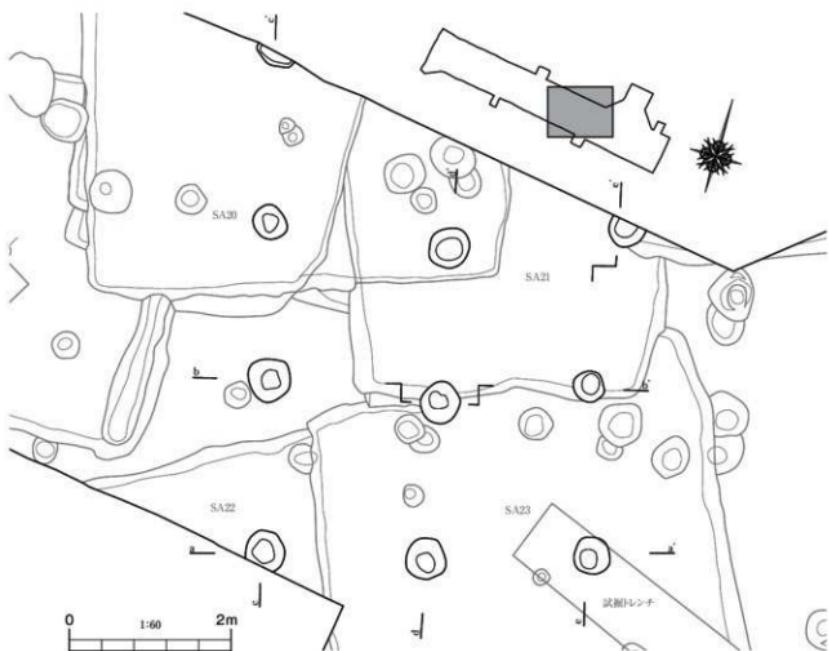
遺構埋土からは須恵器片・土師器片（117～124）、軽石片が出土している。117は須恵器蓋の破片で、端部にはかえりが見られる。121は土師器皿の底部片である。122・123は土師器皿の口縁部片である。122は「く」の字状で、端部は丸い。123は口縁端部をわずかに外反させ、端部は先細りする。124は土師器皿の底部片である。平底で木葉痕が見られる。

SA31は北側から東側がSA29、南側はSA30と、その他にも数基の柱穴と切り合い関係にある。北側のコーナー部分だけが確認された状況であった。確認できた範囲では東西方向に $3.05m + a$ 、南北方向に $0.6m + a$ の方形プランが推定される。

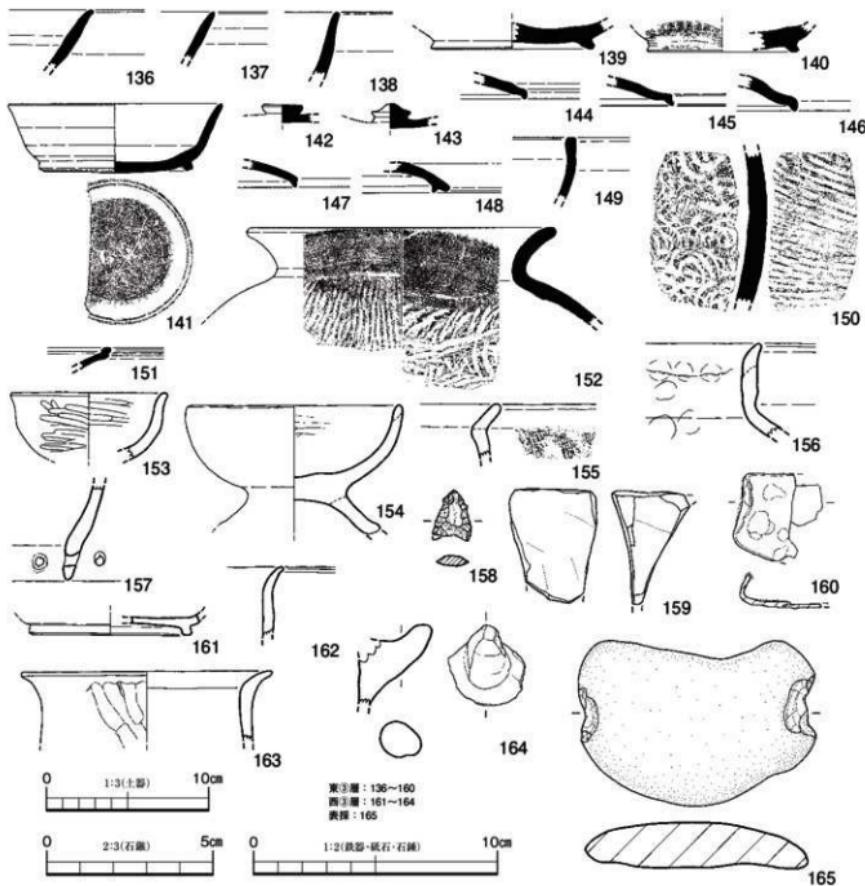
遺構埋土からは土師器片が出土したが、図化に耐えうるものはなかった。

SA36は調査区のもっとも東端に位置する竪穴住居跡で、方形の竪穴住居跡の北西側コーナー部分だけが確認された状況であり、南側から東側の大半が調査区外に延びている。確認できた範囲では西北東方向に $1.2m + a$ 、北西南東方向に $1.35m + a$ の規模を呈している。また床面には主柱穴が1基検出された。

遺構埋土からは土師器片が出土したが、図化に耐えうるものはなかった。



第26図 SB39実測図 ( $S=1/60$ ) 及び出土遺物実測図 ( $S=1/3$ )



第27図 遺物包含層出土遺物及び表探遺物実測図（土器 S=1/3、石錐 S=2/3、鉄器・砥石・石錐 S=1/2）

### 土器埋設構造38

SA29~31とSA36との間で検出された須恵器蓋1点(132)と企救型甕の脇部片2点(130~131)を組み合わせた土器埋設構造である。130は底部方向を上に、131は底部方向を下に据えて円形の開いを構成し、北西方向の開いの低い部分を埋めるように132を立てていた。掘り込みのプランについてはこれらの土器が検出された段階では不明瞭であったので、土器を実測して取り上げた後にもう一度精査を行って不整梢円形のプランを確認することができた。掘り込みは浅く土器の下部を埋める程度のものであった。なお、掘り込みの埋土やその周辺からは焼土や炭化物は検出されなかったが、出土した3点の資料には外面の一部に二次的な焼成の痕跡が観察されることから、機能としては炉の可能性が高いと考えられる。また本構造は表土直下で検出されたもので、検出時に132の一部が欠損して

いる状況が確認できていた。その欠損箇所の風化具合から本遺構の上部は古代以降の造成によって削平を受けていたことが推測され、このことから130・131も同様に削平を受けていたと考えられる。

130・131は両者共に暗褐色の色調を呈し、胎土に石英・砂粒を含んでおり、外面に単位の短く粗いハケメ調整が断続的に観察される点から（農前）企救型甕に分類されるものと考えられる。また131は頸部に沈線が確認されている。132の須恵器は内面の凹凸が著しいため蓋と分類したが、全体の形状からは皿の可能性も考えらえる。なお、内面中心部付近にはやや光沢のある灰色の付着物が観察される（図版7の⑤）。

#### 掘立柱建物跡39・43

掘立柱建物跡は調査区の中央より東側付近にて可能性があるものを含めて2棟検出されている。両者共に堅穴住居跡と切り合い関係にあったが、遺構検出時に新旧関係を把握することはできなかった。

SB39はSA20～23と切り合い関係にある梁行2間、桁行3間以上の掘立柱建物跡で、北側は調査区外に延びている。柱間は2～2.2mで柱穴は全て素掘りである。柱の痕跡は検出時も土層観察においても確認することができなかつた。

柱穴の埋土からは須恵器片・土師器片（133～135）が出土している。133は須恵器の蓋で宝珠系のつまみを持ち、口縁端部にはかえりが見られる。134は須恵器甕の胴部片で内面には同心円状の当て具痕が見られる。135は土師器甕の底部片である。平底で木葉痕が見られる。

SB43はSA25・28・34と切り合い関係にある梁行2間、桁行2間以上の掘立柱建物跡と考えられる。各柱間は2.1～2.2mで柱穴は全て素掘りである。本遺構については北側に大半が延びることが予想されており、その規模を把握することは今回の調査区域だけでは困難なため、本遺構については掘立柱建物跡の可能性がある柱穴の並びを確認したという事象の指摘にとどめておく。

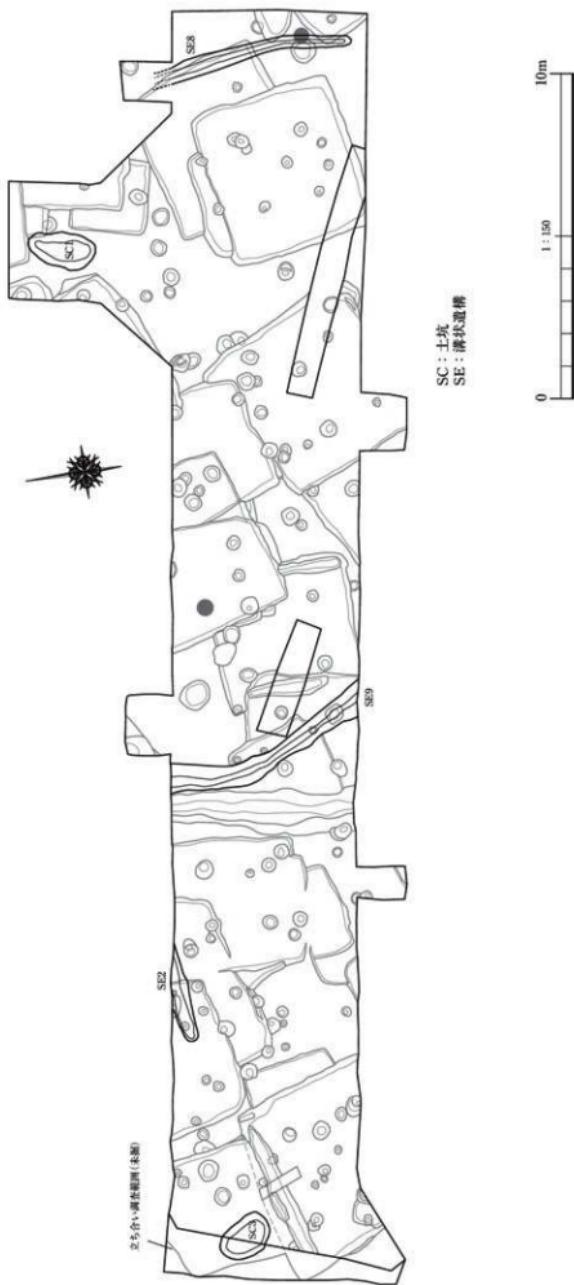
## 第2節 遺物包含層の調査（第27図）

第1章で述べた通り、第③層が古代の遺物包含層であった。この③層は調査区全域で検出されたが特に西側と、東側の北方向に突出する箇所で厚く堆積していた。③層から出土した遺物も概ね堅穴住居跡から出土した遺物と同様のものばかりで、把握できなかつたが今回検出された古代の遺構はこの層の中から掘り込まれている可能性が高いと考えられる。またこれまで述べてきたように③層中に床面が存在した遺構もあつただろう。本節では③層から出土した遺物について報告する。

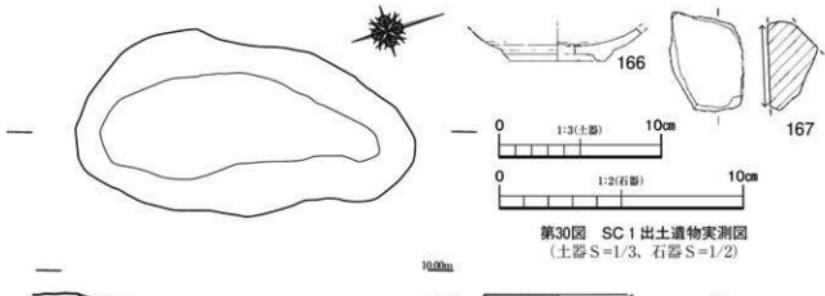
138～160は東側の突出部で出土した遺物である。138～152は須恵器の破片である。136・137は直線的な体部の坏の口縁部片で、138は緩やかに外反するものである。139・140は高台が低く、底部は丸い坏の底部片である。141は6割ほどの残存する坏で緩やかに外反する口縁部と丸い底部で低い高台を持つ。142～148は蓋である。142は扁平なつまみを有し、143は宝珠形のつまみを有する。144～147は口縁端部にかえりがなく、148にはかえりがある。151は前述した110と同じ特徴を持つ口縁部片である。153～157は土師器である。153は坏、154は高坏である。155・156は甕である。157は甕の底部片で棧渡しの孔が見られる。158は頁岩製の打製石器である。103と同じように混入品と考えられるが、こちらも第1砂丘の形成時期を推測する際の資料と捉えられる。159は砥石である。160は鉄製の鎌で、根元の折り返し部分の破片である。

161～164は西側から出土した土師器片である。161は低い高台の坏の底部片である。162・163は甕の口縁部片である。両者ともに端部は先細りする。162はわずかに外反する形体で、163は屈曲が弱い「く」の字状を呈する。164は甕の把手の破片である。

165は本遺跡の表土中から出土した扁平な砂岩礫の端部を打ち欠いた石錐である。



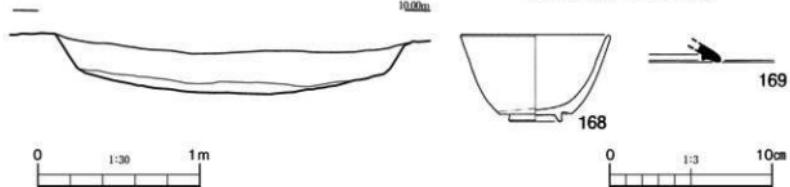
第28図 片瀬原第2遺跡中世以降遺構配置図 (S=1/150)



第29図 SC 1 実測図 (S=1/30)

10.00m

第30図 SC 1 出土遺物実測図  
(土器 S=1/3、石器 S=1/2)



第31図 SE 9 実測図 (S=1/3)

168

169

## 第IV章 中世以降の調査

中世から近世の遺構は第1章で述べた通り、古代の遺物包含層である③層において検出されている。

古代の遺構と比べると希薄な状況で、調査区の西側で溝状遺構1条(SE 2)、土坑1基(SE 3)、調査区中央で溝状遺構1条(SE 9)、東側で溝状遺構1条(SE 8)、土坑1基(SC 1)が検出された。ここでは遺構埋土から遺物が出土した遺構(SC 1とSE 9)について報告を行う。

SC 1は東西方向に1.12m、南北方向に2.6mの不整長楕円形プランの素掘りの土坑である。遺構埋土からは磁器片(166)、砥石片(167)が出土した。166は釉薬が見られるが外面は底部付近までで、高台部分にかけては削り取っている。また内面は見込み部分以外に施釉していたものと推定される。

SE 9は北から南東方向に方線を取る溝状遺構で、調査区中央付近において屈曲している。幅は0.45～0.85mで、検出面からの深さは0.25mで断面は逆台形を呈している。遺構埋土からは陶磁器(168)や須恵器片(169)、土師器片が出土した。168は信楽焼の壇である。

## 第V章 まとめ

### 片瀬原第2遺跡の古代の集落の様相

今回の調査区は幅概ね6m、長さが38mというトレンチ状のものであったが堅穴住居跡が26棟、掘立柱建物跡2棟も検出された。この集落の年代を検討するために遺構埋土から出土した須恵器の蓋坏の特徴を概観する。蓋は宝珠形のつまみ(133・143)やそれが扁平化したもの(32・142)とつまみを持たないもの(3)が見られる。また口縁部を見るとかえりがあるもの(23・50・78・133など)とないもののが存在する。かえりがないものについては折り曲げて口縁部を成形しているもの(46・

48・90・145など)が多い。坏は高台を有するものばかりで、高台の高いもの(127・128)、低いもの(89・140・141)がある。体部については屈曲が見られるもの(44・89・138・141など)が多く、直線的なもの(137)は少ない印象を受ける。これらの特徴から一部に外れるものもあるかもしれないが、概ね7世紀後半から8世紀中ごろの間に収まるものと考えられる。このことは土師器の高台付坏(2)の形体、屈曲の著しい逆「L」字の口縁部を持つ土師器壺(49・96)や、底部が上げ底や平底を呈し木葉痕を残す土師器壺(30・74・75など)の存在もその裏付けとなるだろう。

この時期の集落跡として近郊には一つ瀬川流域にある古城第2遺跡があげられる。この遺跡は古墳時代中期から営まれ、古代においては掘立柱建物跡を主体とした長期間営まれた集落跡である。さらに円面鏡や香炉、「金光」と刻まれた須恵器などの注目される出土遺物があり、日向国分寺に瓦を供給する瓦・須恵器の製作集団の集落の可能性が指摘されている。ここと比較すると本遺跡は短期間に営まれた堅穴住居跡主体の集落で、同時期の集落とはいえ様相に大きく違いがある。

一方、本遺跡から南南東方向に直線で800mほど離れている片瀬原遺跡の調査成果を見ると、60mという狭い調査区の中で9世紀代に位置づけられる堅穴住居跡が6棟も検出されている。この集落は同じ砂丘上に立地し、堅穴住居跡を主体とするところから、遺跡の年代以外は本遺跡と共通する点が多い。このことから古代における本砂丘上の集落の中心が片瀬原第2遺跡から片瀬原遺跡へ移ったという可能性を指摘することができる。この2つの調査事例は両者ともに狭小の調査区であり、今後の調査事例の増加によって本仮説が検証されていくことを期待する。

#### 土器埋設遺構について

本遺跡からは土器埋設遺構が5基検出された。うち3基は堅穴住居跡の火廻と考えられるものであり、いずれも平底の土師器壺が埋設されていた。掘り込みについては底部だけを埋め込む程度の浅いもの(SA20)と壺の半分以上を埋め込むもの(SA10・23)と見られ、また地床炉と考えられる掘り込みが隣接するもの(SA10・20)と単独のもの(SA23)と見られた。

土器埋設遺構38は3つの土器片を組み合わせたやや特殊な印象を受ける。須恵器と(農前)企救型壺を使用しており、本集落の中心の時期からは後出する可能性が高い。本遺構も前述のとおり炉跡の可能性があり、堅穴住居跡内で検出された土器埋設遺構と同じ機能を想定させる。

一方、土器埋設遺構37は掘り込みが確認できなかった点、焼土や炭化物が確認されずに土器にも二次的な焼成が見られなかった点、土器がやや傾いた状況で検出された点と他の4基とは異なる特徴を多く持っている。このことから本遺構は炉とは異なる機能を考察する必要があろう。

#### 【引用・参考文献】

- 今塩屋毅行2004 「南部九州古墳時代の火廻－土器利用炉に着目して－」『福岡大学論集－小田富士雄先生退職記念－』 小田富士雄先生退職記念事業会
- 今塩屋毅行2011 「日向国における古代前期の土師器壺とその様相－時間軸の設定を目指して－」『古文化談義』 第65号 九州古文化研究会
- 今塩屋毅行2014 「古代の農前・農後系土師器－『企救型壺』の軌跡－」『宮崎県央地域の考古資料に関する編年の研究－東九州道調査以後の新地平－』 宮崎考古学会
- 今塩屋毅行2017 「日向における律令期の集落と土器」『一般社団法人日本考古学協会 2017年度宮崎大会研究発表資料集』 日本考古学協会2017年度宮崎大会実行委員会
- 今塩屋毅行・秋成雅博2006 「松ヶ迫窯跡の再検討」『宮崎考古』第20号 宮崎考古学会
- 竹中克繁2008 「日向国における古代土器の変遷－宮崎平野部の須恵器土師器壺編年－」『先史学・考古学論究』 V (甲元真之先生退任記念) 龍田考古学会
- ※参考文献の一部及び「下耳切第3遺跡」「片瀬原遺跡」「古城第2遺跡」「下村窯跡」「牛頭窯跡群」などの調査報告書の詳細については頁数の都合上割愛した。ご了承いただきたい。

第1表 出土土器観察表①

開敷質 因番号	番号	遺構等	種別	法量cm( ) : 備考	色 著		焼成	調 整		胎土 (上: mm 下: 厘)		備 考	実測 番号					
					口径	底径	器高	外 面		内 面		A	B	C	D	E		
								外 面	内 面	外 面	内 面							
P10 6.6.10	1	SAA	環	- - -	灰	灰白	7.5YR8/1	良好	回転ナメ	回転ナメ			粘土	白 2mm/層		2		
	2	SAA	高台付环	(13.3) (10.0) 3.85	にふい黄褐色 10YR4/4	にふい黄褐色 10YR4/4	7.5YR6/4	良好	回転ナメ	回転ナメ	1 少		灰面	静止ハラケリ 胎土・灰・層 3mm/多	108			
	3	SAA	环	- - -	灰褐色	灰褐色	7.5YR5/2	良好	回転ナメ	回転ナメ	微少			内面 丹徳力	146			
	4	SAA	环	- - -	にふい灰 7.5YR5/3	にふい灰 7.5YR5/3	7.5YR6/4	良好	回転ナメ	回転ナメ	微少				104			
	5	SAA	环	- - -	灰黄	灰白	10YR7/1	良好	回転ナメ	回転ナメ	微少				3			
	6	SAA	环	14.85	にふい黄褐色 5YR5/4	にふい黄褐色 5YR5/4	7.5YR6/4	良好	青いタリの痕 ミガキ	ミガキ			黒斑あり	粘土 明赤系1.5mm/層	107			
	7	SAA	环	- - -	明褐色	にふい黄褐色 5YR7/2	7.5YR6/2	良好	工具ナメ ナメ	工具ナメ ナメ	2 多 1 少	1.5 推		内面 二次焼成	110			
	8	SAA	环	- - -	にふい黄褐色 10YR5/3	にふい黄褐色 7.5YR6/2	7.5YR6/4	良好	ナメ	ナメ	2 多 1 少				147			
	9	SAA	环	- - -	にふい黄褐色 7.5YR6/4	にふい黄褐色 7.5YR6/4	7.5YR6/4	良好	ナメ	ナメ	1 微少				144			
	10	SAA	环	(7.8)	にふい黄褐色 10YR5/3	にふい黄褐色 7.5YR5/3	7.5YR6/3	良好	ナメ	ナメ	3 多 1 少			底面 本底底 内面灰面 黑斑	145			
	11	SAA	环	(7.8)	にふい黄褐色 7.5YR6/4	にふい黄褐色 7.5YR6/4	7.5YR6/2	良好	ナメ	ナメ	1 多 1 少			底面 本底底	143			
P10 6.6.10	12	SAA	土質品 支脚	5.0 最大径 2.8 厚さ 2.3 (厚)	にふい黄褐色 10YR6/4	-		良好	工具ナメ					もの跡 二次焼成 胎土 灰微少	109			
	14	SA5	環	(3.7)	灰褐色	灰白	N7.0	良好	回転ナメ ナメ	回転ナメ ナメ	0.5 多		自然	胎土 回転ハラケリ 胎土 白 2mm/多	4			
	15	SA5	环	- - -	にふい黄褐色 10YR7/4	にふい黄褐色 10YR7/4	7.5YR6/3	良好	回転ナメ	回転ナメ			胎土	胎 2mm/少	105			
	16	SA5	环	- - -	にふい黄褐色 7.5YR6/4	にふい黄褐色 7.5YR6/3	7.5YR5/3	良好	回転ナメの痕 ミガキ	回転ナメの痕 ナメ			胎土	胎 1mm/層	103			
	17	SA5	环	12.8	- 5.5	般	にふい黄褐色 7.5YR6/4	良好	ナメ	ミガキ			胎土	基微多	106			
	18	SA5	环	- - -	にふい黄褐色 7.5YR5/4	にふい黄褐色 7.5YR5/4	7.5YR6/4	良好	回転ナメ	回転ナメ	1 多 1 少				148			
	19	SA5	环	- - -	にふい黄褐色 10YR6/4	にふい黄褐色 7.5YR6/4	7.5YR6/4	良好	ナメ	ナメ	2 多 1 推				149			
	20	SA5	瓶	- - -	般	般	7.5YR6/6	良好	ナメ	ナメ	3 多 2 少				101			
	23	SA1.5 SAA5	環	- - -	崩れ 灰褐色	灰褐色	2.5Y5/2	良好	回転ナメ	回転ナメ	1 多 1 少				14			
	24	SA5 SAA5	环	(18.4)	崩れ 灰褐色	浅黄褐色	10YR7/6	良好	ミガキナメ ナメ	ミガキナメ ナメ	3 多 1 少				102			
P13 第10回	25	SA11	环	- - -	灰褐色	灰褐色	10YR5/2	良好	回転ナメ	回転ナメ					9			
	26	SA11	环	- - -	般	黄褐色	7.5YR6/8	良好	回転ナメ ミガキ	回転ナメ ミガキ			外面	厚底 内面スヌ付着 胎土 厚 1mm/少	93			
	27	SA11	环	- - -	浅黄褐色	灰白	10YR8/4	良好	工具ナメ ナメ	ナメ	3 多				96			
	28	SA11	环	- - -	にふい黄褐色 10YR5/3	にふい黄褐色 10YR5/3	7.5YR5/3	良好	ナメ	ナメ	2 多				95			
	29	SA11	瓶	(26.8)	浅黄褐色	浅黄褐色	10YR8/3	良好	ナメ	ナメ	4 多				86			
	30	SA11	瓶	(8.6)	黑褐	灰褐色	2.5Y3/1	良好	工具ナメの痕 ナメ	工具ナメの痕 ナメ	4 多		外面	スヌ付着 底面 木底底	87			
	31	SA11	环	10.5	にふい黄褐色 5YR6/3	般	5YR7/6	良好	ナメ	ナメ	4 多		外面	スヌ付着 内面化物付着 外内面 厚底	82			
	32	SA12	环	- - -	崩れ 灰褐色	灰白	10YR4/1	良好	回転ナメ ミガキ	回転ナメ ミガキ	1 少		つまみ辺	25cm	10			
	33	SA12	环	- - -	崩れ 灰褐色	灰褐色	2.5Y5/1	良好	回転ナメ ミガキ	回転ナメ ミガキ	1 多				11			
	34	SA12	环	- - -	にふい黄褐色 7.5YR6/4	にふい黄褐色 7.5YR6/4	7.5YR6/4	良好	回転ナメ	回転ナメ			胎土	茶 1mm/少	85			
P13 第10回	35	SA12	环	(7.8)	にふい黄褐色 7.5YR7/4	にふい黄褐色 10YR7/3	10YR7/3	良好	回転ナメ	回転ナメ	1 少		底面	ヘラ切り	150			
	36	SA12	环	6.25	にふい黄褐色 10YR6/3	にふい黄褐色 10YR6/3	10YR6/3	良好	工具ナメ 指揮さえ	ナメ			胎土	茶・灰 4mm/多	89			
	37	SA12	环	(5.7)	灰褐色	灰褐色	7.5YR5/2	良好	ナメ	ナメ	2 多 1 少				152			
	38	SA12	环	- - -	にふい黄褐色 7.5YR6/4	にふい黄褐色 7.5YR6/4	7.5YR6/4	良好	ナメ	ナメ	1		空孔あり 胎土・周・灰 3mm/多	84				
	39	SA16	环	- - -	にふい黄褐色 7.5YR6/4	にふい黄褐色 10YR6/4	10YR6/4	良好	ナメ	ナメ	2 多 1 少		胎土	周・灰 1mm/多	90			
	40	SA16	环	- - -	にふい黄褐色 7.5YR6/4	にふい黄褐色 10YR6/4	10YR6/4	良好	ナメ	ナメ					151			

胎土 A: 宮崎小石 B: 長石・石英 C: 磷灰・角閃石 D: 雪母 E: 黒象

第2表 出土土器観察表②

開敷質 因番号	番号	遺構等	種別	法量cm( ) : 億円	色 調		焼成	調 整		胎土 (上: mm 下: mm)		備 考	実測 番号						
					口径	底径	器高	外 面		内 面		A	B	C	D	E			
								外 面	内 面	外 面	内 面								
P13 第10区	42	SA16	土器	-	-	-	にふい赤褐色 5YR5/3	灰黄褐色 10YR5/2	良好	ナデ	ナデ						外面スッペ着 胎土 黒灰2mm多 底土 木葉灰 胎土 黑灰2mm多	94	
	43	SA16	土器	(10.7)			にふい褐色 7.5YR6/4	灰褐色 10YR4/1	良好	ナデ	工具ナデ						底土 木葉灰 胎土 黑灰2mm多	88	
	44	SA11-12	瓶壺型 环	-	-	-	黄灰 2.5Y4/1	灰黄褐色 10YR5/2	良好	ナデ 糊(ラカゼリ)	糊(ラカゼリ)							1倍	23
	45	SA11-12	瓶壺型 环	-	-	-	灰褐色 10YR5/1	明褐色 5YR7/1	良好	糊(ラカゼリ)	糊(ラカゼリ)							1倍	22
	46	SA11-12	瓶壺型 环	-	-	-	灰白 10YR7/1	灰白 10YR7/1	良好	糊(ラカゼリ)	糊(ラカゼリ)						外内面 摩滅気味	18	
	47	SA12-15'16	瓶壺型 环	-	-	-	灰白 10YR7/1	灰白 5Y5/1	良好	糊(ラカゼリ)	糊(ラカゼリ)								25
	48	SA12-15'16	瓶壺型 环	(15.8)	-	-	灰 7.5Y5/1	灰 5Y5/1	良好	糊(ラカゼリ)	糊(ラカゼリ)							1倍	24
	49	SA10 直筒 直筒	土器	(17.6)	6.75	25.0	灰黄褐色 5YR5/2	灰黄褐色 10YR5/2	良好	糊(ラカゼリ) ナデ	ナデ						外面スッペ着 内面黒斑 底土 木葉灰 胎土 黑灰2mm多	140	
	50	SA10	瓶壺型 环	-	-	-	灰黄 2.5Y6/2	灰白 5Y7/1	良好	糊(ラカゼリ)	糊(ラカゼリ)							微少	7
	51	SA10	瓶壺型 环	-	-	-	灰黄 2.5Y7/2	灰白 10YR7/1	良好	糊(ラカゼリ)	糊(ラカゼリ)								6
	52	SA10	瓶壺型 环	-	-	-	灰黄 2.5Y5/1	灰白 10YR7/1	良好	糊(ラカゼリ)	糊(ラカゼリ)						胎土 白1mm少	5	
P17 第14区	53	SA10	瓶壺型 环	-	-	-	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	良好	手打タキの角 カキメ	同心円文							1倍	8
	54	SA10	直筒 环	(10.2)	-	-	橙 5YR6-5	橙 5YR7/8	良好	糊(ラカゼリ) 花模様	糊(ラカゼリ)						丹健0 外内面摩滅著しい 胎土 粘土少	99	
	55	SA10	土器 环	-	-	-	浅褐色 7.5YR8-8	青褐色 7.5YR8-8	良好	糊(ラカゼリ)	糊(ラカゼリ)						外内面 摩滅 胎土 灰白微少	98	
	56	SA10	土器 瓶	-	-	-	にふい黄色 7.5YR6/4	灰白 10YR6/4	良好	ナデ	ナデ								97
	57	SA10	土器 瓶	(7.6)	-	-	にふい褐色 7.5YR6/4	にふい青褐色 10YR6/3	良好	工具ナデ 糊(ラカゼリ)	ナデ						擦りぬけ 胎土 灰白2mm多	100	
	58	SA10	瓶壺型 环	-	-	-	灰黄 2.5Y5/1	灰 5Y5/1	良好	糊(ラカゼリ)	糊(ラカゼリ)								155
	59	SA10	土器 环	-	-	-	にふい青褐色 10YR6-3	にふい褐色 7.5YR6-3	良好	ナデ	ミガキ								153
	60	SA10	土器 环	-	-	-	にふい青褐色 10YR6-3	灰 10YR5-6	良好	ナデ	ナデ								154
	61	SA10	土器 环	-	-	-	にふい青褐色 10YR6-3	にふい褐色 7.5YR6-4	良好	ナデ	ナデ						内面 黑斑 胎土 灰白2mm少	91	
	62	SA10	土器 环	(17.8)	-	-	淡褐色 2.5Y8/3	淡褐色 2.5Y8/4	良好	ナデ ミガキ	ミガキ						外内面 摩滅 胎土 にふい青褐色2mm少	92	
P19 第17区	63	SE17	瓶壺型 环	(8.2)	-	-	灰白 3Y7/2	灰白 5Y8/2	良好	糊(ラカゼリ)	糊(ラカゼリ)						外内面 摩滅気味 胎土 手打ハラケリ	45	
	64	SE17	高台付环	-	-	-	にふい青褐色 10YR7/4	灰白 10YR7/4	良好	糊(ラカゼリ)	ナデ						内面 摩滅著い 底土 黑斑2mm少	81	
	65	SE17	土器	-	-	-	にふい青褐色 10YR5/3	青褐色 10YR5/3	良好	ナデ	ナデ						1倍	76	
	66	SE17	土器	-	-	-	にふい青褐色 10YR6-4	青褐色 2.5Y6/2	良好	ナデ	ナデ						外内面 スッペ着 胎土 灰1mm多	79	
	67	SA10-19'20	瓶壺型 环	-	-	-	灰褐色 7.5YR5/2	灰褐色 10YR6/1	良好	糊(ラカゼリ)	糊(ラカゼリ)						外内面 自然剥離	16	
	68	SA10-19'20	瓶壺型 环	-	-	-	灰白 10YR7/1	灰褐色 7.5YR6-2	良好	糊(ラカゼリ)	糊(ラカゼリ)								15
	69	SA10-19'20	瓶壺型 环	(11.1)	-	-	灰褐色 10YR6-2	灰褐色 10YR5/2	良好	糊(ラカゼリ)	糊(ラカゼリ)								20
	70	SA10-19'20	瓶壺型 环	(9.0)	-	-	にふい褐色 7.5YR5/3	灰褐色 10YR5/2	良好	糊(ラカゼリ)	糊(ラカゼリ)								21
	71	SA10-19'20	瓶壺型 环	-	-	-	灰白 2.5Y5/1	灰白 5Y5/1	良好	手打タキ	同心円文								17
	72	SA21	土器	11.7	8.75	4.5	青褐色 5YR7/6	にふい青褐色 5YR7/4	良好	糊(ラカゼリ) ナデ ミガキ	ナデ						外内面 スッペ着 底土 ハラカゼリ	131	
P19 第19区	73	SA20	土器	-	-	-	にふい青褐色 10YR6-3	にふい青褐色 10YR6-3	良好	ナデ	ナデ						No.7と同一個体か?	129	
	74	SA20	土器	-	6.2	-	にふい青褐色 10YR6-4	青褐色 10YR5/3	良好	工具ナデ 糊(ラカゼリ)	ナデ						外内面 黑斑 底土 木葉底 No.7と同一個体か?	130	
	75	SA22	土器	-	5.0	-	にふい青褐色 2.5Y6/4	青褐色 7.5YR5/2	良好	糊(ラカゼリ)	ナデ 糊(ラカゼリ)						外内面 黑斑 底土 木葉底	138	
P20 第20区	76	SA20	环	(10.0)	-	-	灰褐色 2.5Y5/2	灰褐色 2.5Y7/1	良好	糊(ラカゼリ)	糊(ラカゼリ)								13
	77	SA20	环	(6.0)	-	-	灰褐色 10YR5/2	灰褐色 10YR5/2	良好	糊(ラカゼリ)	糊(ラカゼリ)						底部 糊(ラカゼリ)	12	
	78	SA20	环	(10.5)	-	-	灰褐色 2.5Y5/1	灰褐色 10YR7/1	良好	糊(ラカゼリ)	糊(ラカゼリ)								19

胎土 A: 宮崎小石 B: 長石, 石英 C: 輝石, 角閃石 D: 霧母 E: 黒象

第3表 出土土器観察表③

開敷質 因番号	番号	遺構等	種別 器種	法量cm( ) : 優元 口径 底径 高さ	色調		焼成	調整		胎土 (上: mm 下: 厘)		備考	実測 番号			
					外側 内面			外側 内面		A	B	C	D	E		
					外側	内面		外側	内面							
	79	SA20	土師器 環	- - -	にいし 7.5R5R3	にいし 7.5R5R4	良好	回転ナラの及 ミガキ	回転ナラの及 ミガキ						外面 久付着 胎土 黒・褐1mm厚	126
	80	SA20	土師器 環	- - -	にいし 7.5R5R4	にいし 7.5R5R4	良好	ミガキ	ミガキ						胎土 褐1mm少	127
	81	SA20	土師器 環	- - -	にいし 7.5R5R4	にいし 7.5R5R4	良好	ミガキ	ミガキ	1 少						157
	82	SA20	土師器 環	(7.2) (3.3) 2.45	概 7.5R7.6	概 7.5R7.6	良好	ナラ	ミガキ						外内面 摩滅気味 胎土 明赤厚1mm多	124
	83	SA20	土師器 環	(6.8)	灰 10YR5.2	灰 NA.0	良好	ナラ	ナラ	7 多					底面 本鐵灰	156
	84	SA20	土師器 環	- - -	にいし 7.5R5R4	灰 10YR5.2	良好	ナラ	ナラ	1 少						123
	85	SA20	土師器 環	(9.6)	にいし 7.5R5R3	灰 2.5Y4.2	良好	工具ナラ	工具ナラ	3 多					内面 黒斑	132
	88	SA21	黑毛器 高台付付	(9.6)	にいし 10YR6.3	にいし 10YR6.3	不良	回転ナラ	回転ナラ						外内面 摩滅著しい 底面 回転ナラ	33
P20 第20周	89	SA21	黑毛器 高台付付	(12.5) (9.2) 4.8	灰 2.5Y4.1	灰 2.5Y5.1	良好	回転ナラ	回転ナラ						外表面 自然鉛付着 底面 回転ヘラタケソリ	1
	90	SA21	黑毛器 环	- - -	灰 2.5Y5.1	灰 2.5Y5.1	良好	回転ナラ	回転ナラ	0.5 少						32
	91	SA21	黑毛器 环	- - -	灰 2.5Y5.1	灰 2.5Y4.1	良好	回転ナラ	回転ナラ						外表面 部分灰化品少	31
	92	SA21	黑毛器 环	- - -	灰 10YR4.1	灰 10YR4.1	良好	回転ナラ	回転ナラ						1 少	29
	93	SA21	黑毛器 环	- - -	灰 5Y4.1	灰 2.5Y5.1	良好	回転ナラ	回転ナラ						1 少	30
	94	SA21	黑毛器 环	- - -	灰 2.5Y5.1	灰 10YR5.2	良好	平行タタキ	同心円文							28
	95	SA21	土師器 环	(14.0)	にいし 10YR7.3	にいし 7.5R7.4	良好	ミガキ	ミガキ	1 少					内面 摩滅気味	128
	96	SA21	土師器 环	(13.0)	にいし 7.5R5R4	にいし 7.5R5R3	良好	ナラ	ナラ 指押えさ	1 多					外表面 ス付着	133
	98	SA22	黑毛器 环	- - -	灰 10YR6.2	灰 2.5Y5.1	良好	平行タタキ	平行タタキ	1 多					胎土 白2mm多	34
	99	SA22	土師器 环	- - -	概 7.5YR6.6	概 10YR7.4	良好	ミガキ	ミガキ						外表面 摩滅	139
	100	SA22	土師器 环	- - -	にいし 7.5YR7.4	概 7.5YR7.6	良好	ナラ	ミガキ	0.5 多						136
	101	SA22	土師器 环	- - -	概 7.5YR7.6	概 7.5YR6.6	良好	工具ナラ ナラ	ヘラミガキ						外内面 摩滅氣味 内面 黒斑 胎土 厚1mm多	111
	102	SA22	土師器 环	- - -	にいし 7.5YR6.4	にいし 5YR5.4	良好	ナラ	布目模						胎土 白灰4mm少	137
	104	SC26	土師器 环	- - -	にいし 7.5YR6.4	にいし 7.5YR6.4	良好	ナラ	ナラ 指押えさ	1 少					胎土 茶・灰1mm多	83
	105	SA20-21	黑毛器 环	- - -	にいし 10YR6.3	灰白 10YR7.1	良好	回転ナラ	回転ナラ							26
	106	SA20-21 21-25	黑毛器 环	- - -	灰 2.5Y7.2	灰 2.5Y6.2	良好	平行タタキ	同心円文						胎土 白1mm少	27
	107	SA21	土師器 环	(17.4)	にいし 7.5YR6.4	灰 10YR4.1	良好	ナラ 指押えさ	ナラ	5 多					外表面 ス付着 内面 黒斑	134
	108	SA21- 23-25	土師器 环	- - -	明黄 10YR7.6	明黄 7.5YR7.4	良好	ナラ	ナラ						外内面 摩滅著しい 底面 ナラ	125
P21 第21周	109	SA22	土師器 环	6.1	にいし 10YR6.3	灰 7.5YR7.1	良好	瓶いナラ	指押えさ						黒斑あり 胎土 灰・白6mm多	142
	110	SA22	土師器 环	- - -	灰 2.5Y5.1	灰 2.5Y5.1	良好	回転ナラ	沈錫							35
	111	SA22	土師器 环	- - -	概 7.5YR7.6	概 7.5YR7.6	良好	ナラ	ミガキ						胎土 にいし 7.5YR7.1	112
	112	SA22	土師器 环	- - -	灰 2.5Y5.1	灰 2.5Y5.1	良好	回転ナラ	回転ナラ						胎土 黑・褐・灰2mm厚	113
	114	SA28	黑毛器 环	- - -	灰 5Y5.1	灰 2.5Y5.1	良好	回転ナラ	回転ナラ							36
	115	SA28	土師器 环	(11.6)	明黄 10YR7.6	明黄 10YR7.6	良好	ナラ 指押えさ	ナラ	2 多						114
	116	SA33	土師器 环	- - -	にいし 7.5YR5.3	にいし 7.5YR5.4	良好	瓶転ナラの及 ミガキ	瓶転ナラの及 ミガキ						胎土 白1mm/堆	122
P22 第22周	117	SA30	黑毛器 环	(13.9)	灰 10YR5.1	灰白 N7.0	良好	回転ナラ	回転ナラ						胎土 白微/多	41
	118	SA30	土師器 环	- - -	にいし 10YR7.4	明黄 10YR6.6	良好	瓶転ナラの及 ミガキ	瓶転ナラの及 ミガキ						外表面 黑色物付着 摩滅著しい 内面 ス付着	121
	119	SA30	土師器 环	- - -	概 3YR6.6	概 3YR6.6	良好	ミガキ	ミガキ						外内面 摩滅気味	115
	120	SA30	土師器 环	- - -	にいし 7.5YR6.4	にいし 7.5YR5.4	良好	瓶転ナラの及 ミガキ	瓶転ナラの及 ミガキ	1 多					外内面 黑色物付着 胎土 工具痕 胎土 黑・白1mm少	119
P23 第23周																

胎土 A: 宮崎小石 B: 長石・石英 C: 輝石・角閃石 D: 霧母 E: 黒象

第4表 出土土器観察表④

開敷質 因番号	番号	遺構等	種別 器種	法量cm ( ) : 優元 口径 底径 高さ	色調		焼成 外側 内面	調整		胎土 (上: mm 下: 重)		備考	実測 番号			
								焼成 外側 内面		胎土 (上: mm 下: 重)						
					A	B		C	D	E						
P24 第24回	121	SA30	土師器 壺	- 12.0 -	にふい褐色 7.5YR6/4	良好	回転ナメ	回転ナメの挂 ナメ					底面 回転ヘラ切り 胎土 細2mm付	120		
	122	SA30	土師器 壺	- - -	にふい褐色 2.5YR6/4	良好	ナメ	工具ナメ ナメ	2 多				外面 繊細あり	118		
	123	SA30	土師器 壺	(15.0) - -	にふい褐色 10YR7-3	良好	ナメ	工具ナメ ナメ	2 多	微 凹			外面 黒色物付着 内面 スス付着	116		
	124	SA30	土師器 壺	- (7.2) -	にふい褐色 10YR5-3	良好	ナメ	ナメ		微 凹			底面 木炭灰 胎土 白灰4mm付	117		
	125	SA29- SA30	土師器 壺	- 16 -	灰白 10YR8-1	良好	ナメ	ナメ			1 倍			38		
	126	SA29- SA30	土師器 壺	- 8.0 -	淡黄 2.5YR8/3	良好	ナメ	ナメ 糊付ナメ					外面 摩擦 胎土 木炭2mm付	135		
	127	SA29- 31	土師器 壺	(11.0) - -	灰黄 2.5YR6/2	良好	回転ナメ	回転ナメ					底面 回転ナメ 回転ヘラケズリ 胎土 白微少付	39		
	128	SA29- 31	土師器 壺	- (8.0) -	灰 3Y6/1	良好	回転ナメ	回転ナメ					底面 回転ヘラケズリ	40		
	129	SA29- 31	土師器 壺	- - -	灰 7.5YR5-1	良好	ナメ タキナ	ナメ 同心円文						37		
	130	土器埋設 道板38	土師器 壺	- - -	にふい褐色 7.5YR5/4	良好	糊付ナメ ナメ	糊付ナメの挂 ナメ	5 多				(陶器) 企型	141'		
P24 第25回	131	土器埋設 道板38	土師器 壺	- - -	灰 7.5YR4/4	良好	糊付ナメ ナメ	糊付ナメの挂 ナメ	3 多				外面 黑色物付着 (陶器) 企型	141		
	132	土器埋設 道板38	土師器 壺	15.7 - 22	にふい褐色 10YR6-3	良好	回転ナメ	回転ナメ					2 ハコ足付 胎内 自然釉付着	63		
	133	SB39	壺	(9.3) - 2.8	灰 5Y5/1	良好	回転ナメ	回転ナメ			1 倍		胎土 白1mm付	42		
P26 第26回	134	SB39	壺	- - -	灰オリーブ 5Y6/2	良好	回転ナメ	回転ナメ					胎土 白1mm付	172		
	135	SH39	土師器 壺	(9.0) -	橙 5YR7-6	良好	ナメ 指揮ナメ	ナメ	1 多				外面 スス付着 内面 背部擦減 底面 木炭灰	77		
	136	東3割 壺	土師器 壺	- - -	灰黄 2.5YR6/2	良好	回転ナメ	回転ナメ					口唇部 自然釉付着	51		
P27 第27回	137	東3割 壺	土師器 壺	- - -	灰 10YR4-1	良好	回転ナメ	回転ナメ					外面 自然釉付着	52		
	138	東3割 壺	土師器 壺	- - -	灰黄 2.5YR6/2	良好	回転ナメ	回転ナメ						53		
	139	東3割 高台付	土師器 壺	(9.6) -	灰黄 2.5YR7/2	不良	回転ナメ	回転ナメ					外内 摩減	65		
	140	東3割 高台付	土師器 壺	(9.3) -	灰 5Y5/1	良好	回転ナメ	ナメ			1 多		底面 回転ヘラケズリ	64		
	141	東3割 高台付	土師器 壺	(13.0) (9.45) (4.2)	灰 5Y7/2	良好	回転ナメ	回転ナメ					外面 自然釉付着 底面 回転ナメ ハコ足付 回転ヘラケズリ	49		
	142	東3割 壺	土師器 壺	- - -	灰黄 2.5YR5/1	良好	回転ナメ	回転ナメ			1 倍		つまみ紐 22cm	56		
	143	東3割 壺	土師器 壺	- - -	灰 5Y4/1	良好	回転ナメ	ナメ					つまみ紐 23cm 胎土 白1mm少	55		
	144	東3割 壺	土師器 壺	- - -	灰白 5Y7/1	不良	回転ナメ	回転ナメ					胎土 白・灰微少	61		
	145	東3割 壺	土師器 壺	- - -	灰オリーブ 5Y6/2	良好	回転ナメ	回転ナメ						60		
	146	東3割 壺	土師器 壺	- - -	灰白 5Y7/2	良好	回転ナメ	回転ナメ					外面 摩減気味	59		
P27 第27回	147	東3割 壺	土師器 壺	- - -	灰 5Y6/2	良好	回転ナメ	ナメ		0.5 少			つまみ紐 23cm 胎土 白1mm少	58		
	148	東3割 壺	土師器 壺	- - -	灰黄 2.5Y5/1	良好	回転ナメ	回転ナメ					外面 自然釉付着	62		
	149	東3割 跡	土師器 壺	- - -	灰白 5Y7/2	良好	回転ナメ	回転ナメ					胎土 白・灰微少	54		
	150	東3割 壺	土師器 壺	- - -	灰黄 2.5Y5/1	良好	平行タキナ	同心円文					外面 自然釉付着 胎土 灰・墨2mm少	66		
	151	東3割 壺	土師器 壺	- - -	灰白 5Y6/1	良好	回転ナメ	回転ナメ						57		
	152	東3割 壺	土師器 壺	(18.6) -	灰白 2.5Y5/2	良好	回転ナメ	平行タキナ						50		
	153	東3割 壺	土師器 壺	(9.7) -	にふい褐色 3Y6/4	良好	ミガキ	ミガキ	1 多						70	
	154	東3割 壺	土師器 壺	13.0 - -	にふい褐色 7.5YR5/3	良好	ナメ ミガキ	ナメ ミガキ	1 倍				内面 スス付着 底面 指揮ナメ	75		
	155	東3割 壺	土師器 壺	- - -	灰陶 7.5YR4/2	良好	ナメ ハコメ	ナメ ハコメ	1 多				(陶器) 介替型 胎土 灰5mm少	69		
	156	東3割 壺	土師器 壺	- - -	にふい褐色 7.5YR6/4	良好	ナメ 指揮ナメ	ナメ 指揮ナメ	4 多					67		

参考胎土 A: 宮崎小石 B: 長石、石英 C: 輻石、角閃石 D: 霧母 E: 黒象

第5表 出土土器観察表(5)

測定員 固番号	番号	造構等	種 別	法量cm( ) : 優元			色 著		焼成	調 整		胎土 (上: mm 下: 重)		備 考	実測 番号				
				口径	底径	器高	外 面			外 面	内 面	A	B	C	D	E			
							外 面	内 面		外 面	内 面	多	少	多	少				
P27 第27回	157	東西削	土師器 瓶	-	-	-	にふい黄褐色	にふい黄褐色	良好	ナデ	ミガキ	3	2	浮孔あり 内面風化氣味		68			
	161	東西削	土師器 高台付环	-	(97)	-	にふい黄褐色	灰黃	良好	回転ナデ	回転ナデ	多	少	浮孔	回転ナデ	73			
	162	東西削	土師器 壺	-	-	-	にふい黄褐色	にふい黄褐色	良好	ナデ	ナデ	2	少			71			
	163	東西削	土師器 壺	(154)	-	-	10YR6/3	7.5YR6/4	良好	工具ナデ	ナデ	2	多			72			
	164	東西削	土師器 瓶	-	-	-	10YR8/4	10YR7/4	良好	粗いナデ	-	2	少			74			
P20 第31回	169	SE9	組合器 甕	-	-	-	灰黃	灰黃	良好	回転ナデ	回転ナデ			粗	粗	44			
※胎土 A: 宮崎小石 B: 長石・石英 C: 輝石・角閃石 D: 雲母 E: 黒象																			

第6表 出土陶磁器観察表

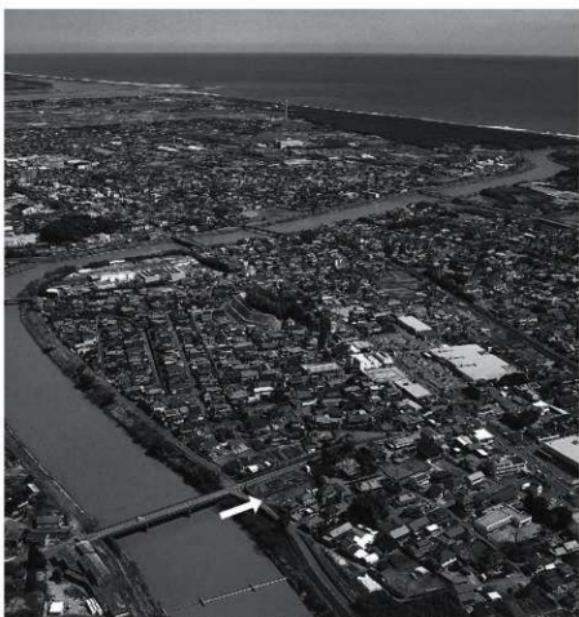
測定員 固番号	番号	造構等	種 別	器 種	法量cm( ) : 優元		産地	時期	備 考				実測 番号	
					口径	底径			外 面	内 面	外 面	内 面		
P20 第30回	166	SC1	陶器器	瓶	-	(5.8)	-	中国?	14~15c?					46
P20 第31回	168	SE9	陶器	瓶	(9.0)	(3.2)	5.3	信楽	18C後半					78

第7表 出土石器観察表

測定員 固番号	固番号	測定番号	造構等	器 種	石 材	長さ(cm)		幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備 考				実測 番号
						長さ (cm)	幅 (cm)				外 面	内 面	外 面	内 面	
P20 第20回	86	SA20	敲石	砂岩	10.70	8.90	5.85	822.3							160
		103	SA23	打製石器	チャート	2.30	1.35	0.30	0.7						158
P22 第22回	113	SA25	敲石	砂岩	6.50	6.20	2.90	172.1							161
		158	東工削	打製石器	頁岩	2.10	1.30	0.30	0.5						159
P27 第27回	159	東工削	敲石	凝灰岩	4.65	3.60	3.20	44.5							163
		165	表拂	石拂	砂岩	6.80	9.85	1.90	174.3						164
P20 第30回	167	SC1	敲石	砂岩	4.10	3.00	2.10	30.4							162

第8表 出土鉄製品観察表

測定員 固番号	固番号	測定番号	造構等	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備 考				実測 番号	
									外 面	内 面	外 面	内 面		
P10 第6回	13	SA4	棒状鉄製品		6.55	1.00	0.30	4.7						165
		21	SA5	棒状鉄製品	3.10	0.55	0.25	0.8						166
		22	SA5	棒状鉄製品	3.00	0.65	0.20	0.6						167
P13 第10回	39	SA12	棒状鉄製品		1.95	0.40	0.30	0.3						168
P20 第20回	87	SA20	棒状鉄製品		3.00	0.70	0.35	0.8	黒鐵某部小					169
		97	SA21	棒状鉄製品	14.60	1.10	1.10	12.7						170
P27 第27回	160	東工削	鍊		3.60	3.65	0.30	7.7						171



遺跡遠景 南西から（矢印部分が調査地）



SA29～31 北西から

図版2



SA 4~6 南から



SA10-20 南西から



SA11-12 東から



SA18・19 南西から



SA20・21 東から



SA21 南側壁面坏出土状況 東から

図版4



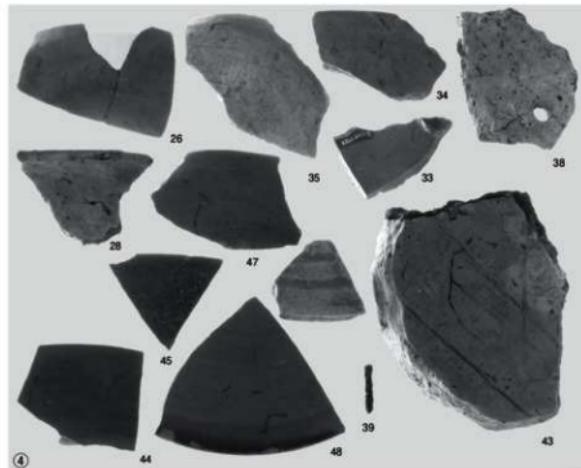
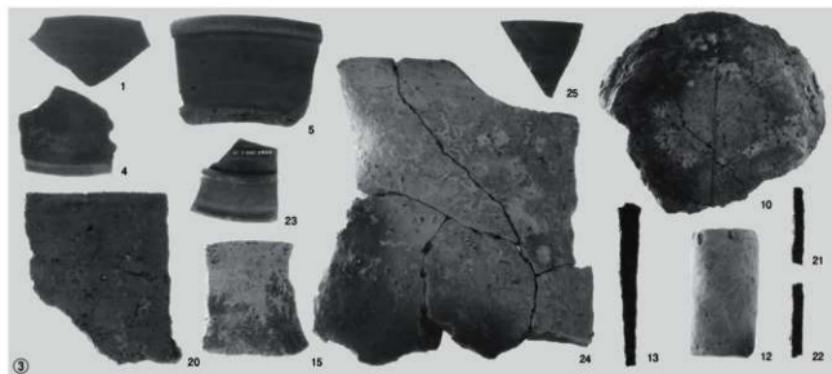
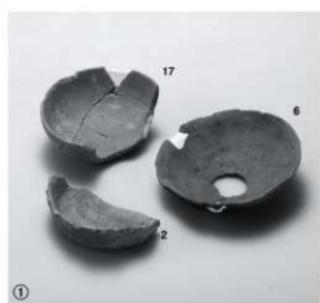
SA28-33~35 北西から



SA28 西から



土器埋設構38 北から

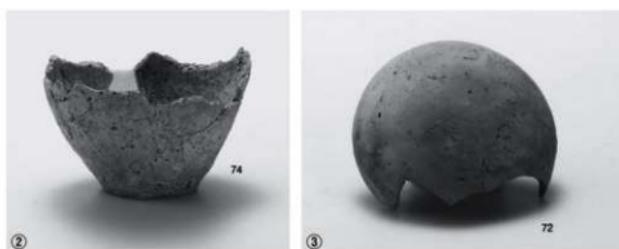


①・③ : SA 4・5・11出土土器

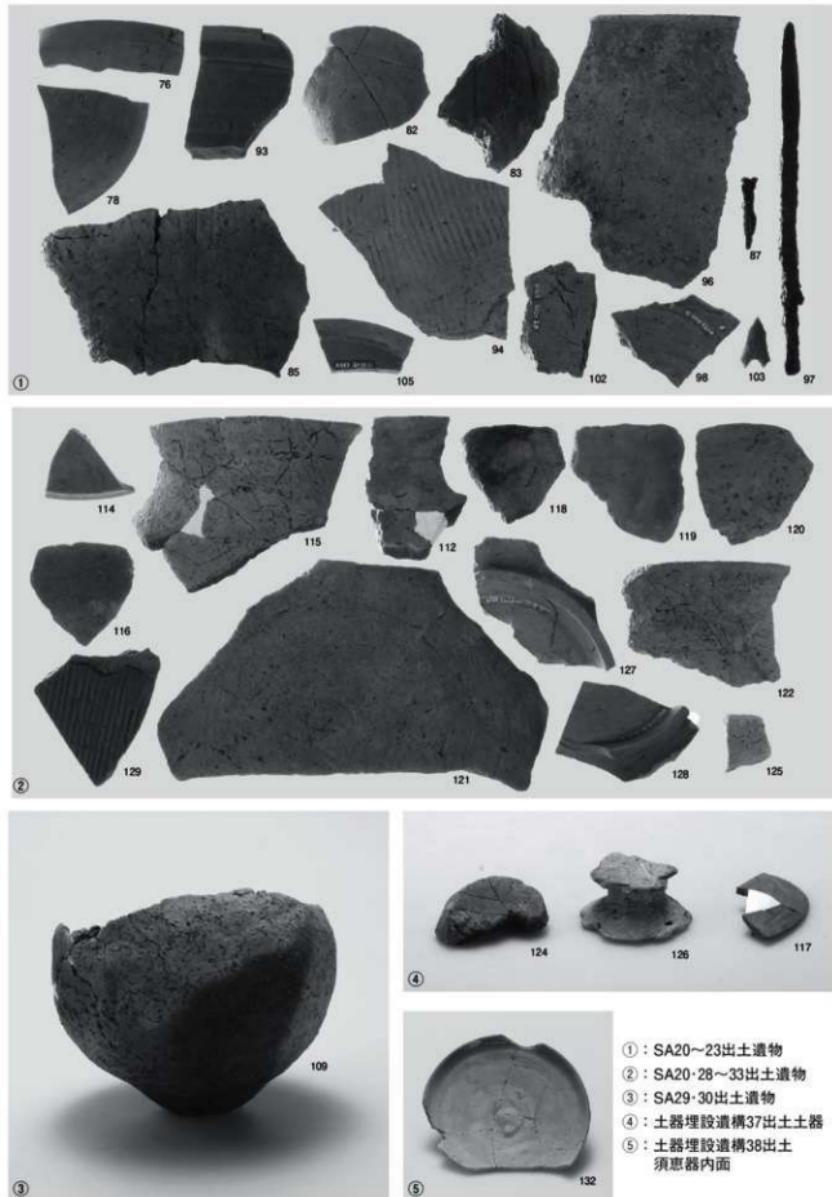
②・④ : SA 11・12・15・16  
出土遺物

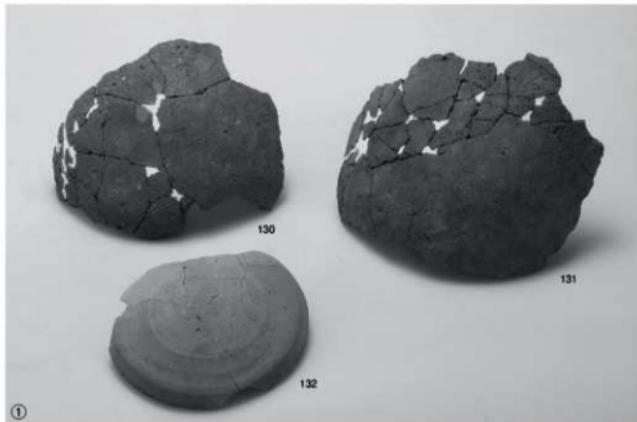
⑤ : SA 10土器埋設遺構出土土器

図版 6



- ① : SA10-18~20-SE17出土土器  
② : SA20土器埋設遺構出土土器  
③ : SA21南側壁面出土土器  
④ : SA23土器埋設遺構出土土器  
⑤ : SA21-23-25出土土器



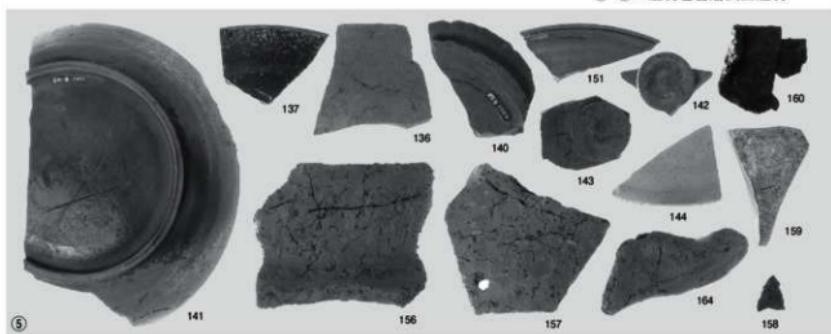


①：土器埋設遺構38出土土器

②：SB39出土土器

③：SC 1・SE 9 出土遺物

④・⑤：遺物包含層出土遺物



## 報告書抄録

ふりがな	かたせばるだいにいせき						
書名	片瀬原第2遺跡						
副書名	民間開発（宅地造成工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第129集						
編集者名	秋成雅博						
発行機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒880-2101 宮崎市大字跡江4200番地3号 宮崎市生目の杜遊古館						
発行年月日	2020年3月						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査原因	種別
かたせばる 片瀬原 だいにいせき 第2遺跡	みやざきけん 宮崎県 みやざきし 宮崎市 さとわらじょう 佐土原町 しもなか 下那珂	45201	19-006	32°0'14" (日本測地形)	131°28'22" (日本測地形)	民間開発 (宅地造成工事)	集落
調査期間	調査面積	主な時代	主な遺構と遺物				
2018.2.5 ～ 2018.3.28	268m <sup>2</sup>	縄文	石器				
		古代	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土器埋設遺構、須恵器、土師器、鐵器など				
		中世	土坑、溝状遺構				
		近世	溝状遺構、陶器など				
特記事項	7世紀後半から8世紀代の切り合い関係のある掘立柱建物跡と竪穴住居跡が26棟も検出された。 須恵器蓋と（豊前）金救型壺胴部片2点の組み合わせ式の土器埋設遺構の検出事例。						

宮崎市文化財調査報告書 第129集

片瀬原第2遺跡

令和2年3月

宮崎市教育委員会



